

# 琉球大学学術リポジトリ

## 第11回琉球大学びぶりお文学賞受賞作品集

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学 公開日: 2018-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 琉球大学附属図書館編 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/38825">http://hdl.handle.net/20.500.12000/38825</a>

第11回  
びぶりお文学賞  
受賞作品集



小説部門 乗り物の鼓動

詩部門 ナビエ - ストークス方程式

西上 正浩

琉球大学

第11回  
びぶりお文学賞  
受賞作品集



小説部門 乗り物の鼓動

詩部門 ナビエ - ストークス方程式

西上 正浩

琉球大学

第十一回琉球大学びぶりお文学賞受賞作品集

第十一回琉球大学びぶりお文学賞受賞作品集 目次

小説部門受賞作

乗り物の鼓動

西上 正浩

6

(琉球大学・理工学研究科博士前期課程二年)

小説部門佳作

水中花

久保田 大地

44

(琉球大学・法文学部人間科学科四年)

詩部門受賞作

ナビエ・ストークス方程式

西上 正浩

84

(琉球大学・理工学研究科博士前期課程二年)

詩部門佳作

滞留

竹澤 さち

90

(琉球大学・人文社会科学科学研究科博士前期課程二年)

閉ざされた花壇の中で

島袋 昂也

94

(琉球大学・法文学部人間科学科四年)

アンサー

古波藏 唯

98

(沖縄国際大学・総合文化学部日本文化学科三年)

春の詩集

荒井 青

102

(琉球大学・教育学部生涯教育課程三年)

選評小説部門

108

選評詩部門

120

選考経過

129

琉球大学びぶりお文学賞は、琉球大学が基本目標として掲げる「地域及び広く社会に貢献する人材」「意欲と自己表現力を有する人材」育成の一環として、言語力(読む力、書く力)を向上させ、想像力、表現力、創造力豊かな学生を育成するとともに、文学の啓蒙活動を高め、地域社会における文学・文化活動のリーダーを輩出することを目的に琉球大学に在学する学生を対象に平成十九年度に設けられました。第七回(平成二十五年度)から、応募資格が沖縄県内の大学生(高等専門学校の場合は本科四年次以上)及び大学院生に拡大されました。

装  
丁  
  
上  
村  
  
豊

# 小說部門



小説部門受賞作

# 乗り物の鼓動

西上 正浩

○

楽しすぎる夢だと寝起きが悪くなる。

那覇空港のベンチは硬くて、あまり寝心地が良くない。

もう一度あの場所に戻りたくて、寝返りを打って目を閉じる。  
でも、あの場所には戻れない。

目を閉じたとき、目から涙がこぼれ落ちる。

別に悲しいわけでも、ましてや嬉しいわけでもない。

ただ、少しでも暖かくて、すごく懐かしい。

—いつだっけ

思い出、思い出というよりは記憶、記憶というよりは願望。

ま、いつか、どれでも――

再度、意識がゆつくりと暗転する。



琉球大学の工学部棟四号館にある僕の研究室は、いつでも冷房が効いている。あまりにも涼しくて快適なので、今の季節が夏であることを忘れてしまうときがある。僕らの研究室はコンピュータシミュレーションで、分子の流れについて解析をする研究を行っている。この研究室は二十四時間三六五日ずっと計算機が稼働している。

計算機は、とても繊細で室内が高温になってしまうとすぐにダウンしてしまい、最悪の場合には計算データが全て消えてしまう。そのため、室内は常に一定の温度を保ち続けなくてはならない。つまり、生きている人間の為に最適な環境が整えられているわけではなく、生命を持たない計算機の為に、最適な環境が整えられているのだ。時間になったので、僕は研究を中断して外に出る。研究室から一步外に出ると、七月中旬沖縄の灼熱地獄が待っている。このうだる様な暑さは、僕の体内に暮らしているありとあらゆる水分を体に留まっておくことを許してはくれない。「出て行け」と言わんばかりに、水分は汗として体外に追い払われる。Tシャツがそれを吸って、さらにそれを太陽が蒸発させる。そして、いつの間にか僕のモノだったはずの水分は世界に溶けて、

世界の所有物になる。やがて上昇気流と一緒に空に昇って、いつの日か恵の雨として誰かの頭上に降り注ぐ。僕に残るのは涙の味がする塩分だけだ。

夏の突き刺す日差しと暑すぎる気温の洗礼を受けて、僕は工学部棟を出て駐車場に置いていた愛車のワゴンRを探す。この車は大学三年生に進級したときに引越しのアルバイトで貯めたお金で購入した。

実に良いデザイン的車だと思う。美しく静かなエンジン。限りなく重さを減らし、不必要なモノを取り除き、複雑に絡み合って、細かいパーツが相互作用し合って、一つの大きな車体を動かしている。

その複雑に入り組んだエンジンを真っ白のカバーで覆い隠し、いとも簡単に、軽々と僕らを目的地へと運び届けてくれる。

車内も広すぎず狭すぎない。最適な距離感で相手と会話ができる。

車に興味は無かったのだが、与えられて使っていくうちに、必要性を実感する様になった。そして何よりも行動範囲が途端に広がり、世界がとても小さくなった。

それまでは、移動するのに三十分掛かっていた場所へ五分で移動できる様になり、目の前にあった奇麗で美しいと思っていたモノが、いつの間にか美しくなくなり、もっと美しいモノを探しに行く様になった。そのことが良いのか悪いのかは分からないけれど、少なくとも、今の僕には車無しの生活は想像できない。

子供の頃に欲しくて仕方なかったおもちゃが大人になって簡単に手に入れることができる虚し

さと少し似ている。

僕は車を見つけて、天然の暖房で暖められた車内に乗り込み、エンジンをかけて車を発進させる。僕らの大学は敷地面積が広いので、大学構内を車や原付で移動する人も少なくない。

大学構内にある信号に引っ掛かり、車を停車させる。

外を見るとグラウンドでアメフト部が地獄の様な猛暑の中、声を張り上げて練習しているのが見える。二十人近くの部員が防具とメットを着けてぶつかり合っている。猛者達がひしめく中、獣の様に大きな声を張り上げて、一際目立っている友人の姿が見える。

僕は彼がアメフトのときに手を抜いている所を見たことがない。

相手がどんな相手で、どの様なシチュエーションだろうと、ぶつかり合うその瞬間に己の生命を削っている。

その姿が車の窓を通して、僕に痛い程伝わって来る。

彼と初めて会ったのは入学式の時だ。大学入学時に福岡から沖縄に来たという彼は僕の席の隣に座っていた。

入学式というのは、始まるまでがやたらと長く、僕は退屈で暇を持て余していた。特にやることもなかったもので、同じ様に暇そうにしている彼に話しかけたのがきっかけで、彼とは仲良くなつた。

別に共通の趣味があるとかではないけれど、入学式後も定期的に一緒に御飯を食べに行ったり、お酒を飲みに行ったりしている。彼は体重100キロを超す巨漢で、単位を山の様に落としてい

るため、僕の知り合いの中で最も留年に近い男だ。

高校時代、彼は陸上部で円盤投げをやっていたらしい。彼から話を聞くと、そこそこ良い結果を出していたらしい。

そして彼は、なぜか大学に入るとアメフトを始めた。

彼と一緒にいると聞いてもいないのに、やたらと僕にアメフトの魅力について熱く語ってくる。昨日もそうだった。



その日は、必修科目の中間テストが終わって、ゆつたりとした気持ちで、彼と一緒に学食で昼食を食べていた。ゆつくりしたい僕に彼は構わず、例の如くアメフトの魅力について、熱く語り始めた。

「俺はアメフトやっていてな、ひとつ気が付けたことがある」

彼は白飯をかつ込んでいた手を止めて僕の方を見る。

「何を？」僕は訊ねる。

彼のトレイには大盛ライスと豚塩丼、照り焼きチキン、そして肉うどんが乗っている。僕が一日に摂取する炭水化物の量を優に越している。僕のトレイは、白身魚のフライとライスだけで少

し寂しい。

「アメフトというスポーツは肉体を痛めつけ、精神をすり減らすことでな、意識の全てが目前の勝負に持つていかれる。そこにあるのは、勝負の駆け引きと力と力の純粹なぶつかり合いだけ。日常の鬱屈した気持ちとか、テストのこととか不必要なモノは全て払い落ちて、勝負の高揚感だけが残る」

そう言うと、彼は嬉しそうに照り焼きチキンを食いちぎる。

確かに、アメフトをやっているときの彼はすごく楽しそうで、見ている僕らもいつの間にか試合に引きずり込まれることがある。

「でも、僕が見に行つた試合ではいつも負けてるよね」

嫌味を言う僕に、彼は少しだけ苦い顔をする。

「うちの大学スポーツ推薦ないだろ？」

知らないし、別に興味もない。面倒臭いので無言で頷く。

「九州内見まわすとスポーツ推薦の大学ばかりで、やっぱり個人で見ると、俺なんかと比べても体格もすごく良いし、技術なんて初心者あがりの俺とは雲泥の差だ」

彼が『雲泥の差』なんて難しい言葉を使ったことに少し驚く。

「俺は強いから一人でも戦うことはできるし、ある程度までは生まれ持った圧倒的なセンスで相手に勝つことができる」

彼はわざとらしく格好付けて、箸の先をこちら側に向けるけど、全然格好良くない。

「でも、海を渡って九州遠征に行つて、リーグ戦を戦つてみて感じたんだけど、強いと思つていた俺は実は弱くて、バケモノみたいに上手くて俺のことをミジンコみたいに簡単に捻りつぶす強い奴がスポーツ推薦のある大学にはごまんといるんだよ」

彼の体格を見ると十分強そうで、僕には彼が捻りつぶされる姿なんて想像がつかない。

「俺はそいつらに簡単に捻りつぶされて、自分が弱いってことを心から実感する。するとだ、『ポジティブシンキング日本代表』の俺でも心が折れてアメフトなんてやめたくなったりする。でも、俺は絶対やめねえの。なんでだと思ふ？」

「わかんない」

「チームスポーツつていうのは、なんだかんと言つても結局は個人の集まりで、基本的に個人で強い奴が多い方が勝つことが多い。アメフトもそう」彼は饒舌になつて、喋り続ける。

「そうなの？」

アメフトのルールすら知らない僕は彼の言いたいことが解らない。

「そうなんだよ。でも、稀にチームの中にある目に見えない何かが上手く絡み合つて、予想もしなかつた様なスーパープレーが起きて、普通じゃ絶対勝てない相手に勝てたりする時があるのよ。逆転の瞬間が。あのときの爽快感はたまらないね。真剣勝負におけるチームスポーツの醍醐味だ」

鼻息荒く彼はそう言うと、照り焼きチキンの横にあつた肉うどんを食べ始める。掃除機のように食物は彼の体に吸い込まれていく。

彼の話を聞くとワゴンRのエンジンの仕組みを思い出す。小さなパーツが沢山集まつて、相互

作用し合い、チームという一つの車体を動かす。妙に納得した僕をよそに、彼は構わず話を続ける。「一人じゃ絶対勝てないバケモノも二人でやれば勝てるかも知れない。俺にできないことをチームメイトがやって、チームメイトができないことを俺がやる。足し算だったチームプレーは掛け算になり、一気に可能性が無限に広がる。努力がもつと楽しくなる。この瞬間を一度味わった俺は、もうアメフトからは離れられない。俺の為にチームがあるんじゃない。チームの為に俺がいる。俺はこのチームの血液だ。前は欲しいと思っていた彼女も今は要らない。アメフトが恋人だね」そう言つて汚い唇を突き出してキスの真似をする。

そして、最後に彼は冷静な顔をして、僕の方を言った。

「お前いつも陰気臭い顔してて『誰も信じてないです。自分で全部できます』って感じだけどさ、お前もアメフトやれば気づくと思うぜ。一人の人間ができることのちっばけさによ」

彼はパスカルのようなことを言いながら、僕のお皿に乗っている白身魚のフライをかっさらう。

—そういうことをするから、君には恋人ができないんだよ。

少し腹が立った僕は、彼の横腹を強めに小突く。

彼のぜい肉という鎧が僕の攻撃をいとも簡単に防ぐ。

そんなことを思い出しながら、車の窓から見えるキラキラした彼の汗と瞳をぼんやりと眺める。

彼は間違ひなく生きていく。生きて鼓動を刻んで、戦っている。

僕は少しだけ彼を羨ましく思う。



信号が青になったので、車を走らせて校門を通り、大学を出る。

彼女との待ち合わせ場所へ向かおう―

僕はこれから長田にあるマクドナルドで彼女を拾って、そして最終目的地の那覇空港へと向かう。僕らが住んでいる宜野湾市から那覇空港までは、高速道路を使えば、二十分くらいで着く。

那覇から熊本への航空便は一日一便しかなくて、午後三時半発のはずだ。だから余裕をもって午後一時半に約束の時間を決めた。

いくつかの坂道を下り、何個かの信号に引っ掛かりながら、約束の十分前に待ち合わせ場所に着く。ドライブスルーの車を横目に見ながら駐車場に車を停める。駐車場には中高生のモノと思われる自転車と原付が大量に停まっている。僕は車から出て店内に入る。

多分、彼女はまだ来ていない。



『申し訳ありません。十五分遅れます』

彼女が五分遅刻するときいつも相手に送る連絡らしい。

そうすれば、相手は遅刻に対する怒りよりも十五分掛かる所を五分に短縮してくれたことに感謝さえするらしい。

その連絡さえ僕には送らない。

約束の三十分後になっても彼女は現れない。

マクドナルドでコーヒーを飲みながら、僕は文庫本を読む。人を待つのは大好きではないけれど、嫌いじゃない。誰かを待たせているという不安感を持たなくて済むし、ゆっくりと落ち着いて自分の時間を楽しむことができる。

これから会う彼女のことを考える。僕よりも歳が一つ上だが、彼女は浪人していて学部は違うけど同年だ。彼女とは二年前に交際を始めた。

出会ったきっかけとか、告白したときのむずかしい気持ちとかは、いつの間にかどこかに忘れてしまった。

その彼女が故郷の熊本に帰省するらしい。

そこで、僕は那覇空港まで送り届ける役割を頼まれた。彼女は頼んだ側なのに、いつも通り、僕を待たせる。

彼女は時間にルーズで、今まで時間通りに来たことの方が少ない。

ふと、昨年二人で行った「はごろも祭り」を思い出す。

そういえば、この日も彼女は遅刻して来た気がする。

九月の最後の日にあるこのお祭りは、宜野湾市に伝わる森の川伝説(はごろも伝説)をコンセプトとしていて、沖縄県内で行われる最後の夏祭りでもある。様々なイベントが多く開催される

ため、毎年大きな盛り上がりを見せる。

クライマックスは夜空に打ち上げられる何発かの打ち上げ花火で、ド派手な演出とともに、お祭りは締め括られ、夏の終わりと秋の到来を知らせてくれる。そのため、このお祭りの打ち上げ花火はいろんな意味で重要な役割を担っている。

打ち上げ花火というのは、いつも苦しそうに揺らめきながら、でも真つ直ぐに空へと登っていく。つぺんまで辿り着くと、光の玉は豪快な音と共に四方八方に煌く無数の小さな星をまき散らし、大きな花を咲かせる。夜空に咲く刹那の花びらは孤独な僕らに永遠をくれる。

そして、見上げる人達の憧憬を全て抱えながら、ゆっくりと名残惜しそうに消えていく。そして、暗くなった夜空を見上げると僕らは自分自身が本当はたった一人であることを思い知らされる。そのことがなんだかすごく怖くて、小さい頃僕は打ち上げ花火があんまり好きじゃなかった。

午後九時に全ての花火が打ち終わり、盛大な歓声と拍手の後、少しの静寂が訪れる。

そのときに僕は小さい頃見た打ち上げ花火の気持ちに蘇って、なんだかひどく寂しくなった。独りぼつちな気がして、不安になり左手を伸ばすと、そこには自分と近いけど、少しだけ違う温度の彼女の右手があった。花火みたいに消えていなくなりそうで、怖くなり少しだけ握りしめると、怯えるような優しいような、そんな力で握り返される。

彼女も僕と同じで怖くて寂しいのだろうか――

僕から見たら、いつも大きな存在である彼女は、本当はものすごく小さくて、吹けば飛んで消えてしまう程細いことをはじめて僕は知った。

きつと、人間は一人では脆くて不完全で欠点だらけなのだろう。

ふと、昔絵本で読んだギリシア神話を思い出した。

絵本によれば、元々人間は男と女が一つの肉体と心で完全な存在だったらしい。それを妬んだ神様が生意気だと怒って肉体と心をそれぞれ男と女の二つに分断した。分断された不完全な人間達は途方に暮れてしまう。そしていつの日か完全な存在になるために、人間達は分断された片割れを常に探して彷徨っているらしい。

そんなことを思いながら、僕は彼女の手を握りしめる。

彼女の掌を通して、彼女の心臓の音が聴こえて来る。

右と左。二つで一つの僕らの心臓の鼓動が聴こえる。

僕はこのお祭りで彼女のちっぽけな手を握ったとき、遠い昔に神様に分断された僕の片割れをようやく見つけた様な気がした。

誰かを好きになるのに理由は要らなくて、愛情を伝えるのに言葉は要らない。ただ傍に居て手を握ってくれるだけで、心の中にある空っぽの水槽はゆつくりと、滑らかに、優しく、満たされていく。彼女と交わした会話の内容は、殆ど記憶に無いけれど、その日の火花は今まで見たどの火花よりも奇麗で、何よりも僕に優しい安心をくれた。

いつも蒸し暑いはずの沖繩の夏夜は、その日はとても心地良くて、気持ち良い秋の到来を感じさせてくれたのを覚えている。

あの日の「はごろも祭り」から僕は何か変わったのだろうか。車を持って、少し知識が増えて、世界の仕組みを少しだけ知った。外を見ると相変わらず、灼熱の太陽がアスファルトを焼いている。僕の中で何か変わっても、世界は何にも変わらない。



「ありがとう」

約束の時間から、きっかり一時間後の午後二時半に彼女はマクドナルドに現れた。いつもと同じ、すらっとした体型で肩まで伸びた髪を靡かせて、綺麗な大きな目で僕の目を見ながら言う。何に対する「ありがとう」なのか解らないけれど、いつも彼女が待ち合わせに遅れて来るたびに、僕に言ってくる。どんなに長く待たされていても、この声を聞くとなぜか僕は優しい安心感に包まれる。

「今から高速使えば、ギリギリ搭乗手続きに間に合うね」

僕は少しだけ笑ってそう言うと、コーヒーの紙コップをゴミ箱に入れて外に出る。

しばらく放置していたワゴンRの車内は蒸し風呂状態なので、エンジンをかけ、冷房を入れてしばらくしてから乗り込む。

彼女が助手席に乗り込んだのを確認し、空港へ向けて出発する。

いつもの様に助手席の彼女がiPhoneをケーブルで繋いでビートルズを流す。彼女は最近の流りりの音楽はあまり聞かずに、いつもビートルズばかりを聞いている。

彼女が言うには、ビートルズは心のリズムそのもので、自分さえ知らない心の奥の方に在る晴れ渡っていたり、恥ずかしかったり、醜かったりする心の波長を的確に表現してくれるらしい。時間が経っても色褪せない、いつまでも変わらない不変の軽快なリズムだとも言っていた。

正直、僕には眠そうな声で歌う四人組の良さはあまり解らない。

「どれくらい帰るんだっけ？」僕は訊ねる。

そういえば、彼女が帰省をすることは一週間前から知っていたが、帰省の期間は聞いていなかった。「わかんない。もう沖繩には戻らないかも」

普通の温度で彼女は答える。まだ大学三年生の僕らは卒業まであと一年ある。彼女がいつも言う冗談にしてはセンスがない。機嫌が悪いのだろうか。返事に困まったので、話題を変えてみる。

「さすがに熊本は、ここより涼しくて過ごしやすそうだね」

僕は前に一度、高校の修学旅行で熊本に行ったことがある。

確か十月の終わりの方で、訪れた熊本は熊本城が壮麗だったことと、半袖半ズボンで行った僕を寒すぎる九州の風が容赦なく襲い掛かって来たことを覚えている。七月とはいえ、ある程度は涼しいはずだ。少なくともここよりは。

「どうかな。多分暑さは、こことあんまり変わらないと思うよ。それに九月とか十月になると

断然沖繩の方が過ごしやすいよ」少し安心した声で彼女は答える。寒いことが大嫌いな彼女は、沖繩の暖かい秋と冬が大好きだと少し前に話してくれた。

「だよね」

なぜか、僕は少しだけ嬉しくなる。

「明日、海洋博花火大会だよね？」突然彼女が言った。

「そうだね。そういえば」

沖繩本島北部の方で毎年七月に行われているこの花火大会は、約一万発の花火が豪快に打ち上げられる沖繩県最大の花火祭りだ。

僕は小さい頃に一度、父と母と兄と弟の家族五人で行ったことがある。そのときは一万発の花火のすごさよりも、帰り道でのものすごい車の渋滞と車内でやったパパ抜きの方が思い出に残っている。たしか弟が異様に弱く、途中で泣きだした記憶がある。

「行きたかったな。まだ私行ったことないんだよね」彼女が少しだけ悲しそうに言った。

彼女は明日から帰省するから今年は海洋博花火大会に行くことはできない。

「来年一緒に行こう」

そう言つて、彼女の方を横目で見るけれど、なぜか返事は返つてこない。やっぱり、彼女は機嫌が悪いのだろうか。

「今年も、はごろも祭り一緒に行く?」

夏休み最終日の花火大会に今年も一緒に行きたくて僕は訊ねる。

「行かない」

「そっか」

少しだけ重たい沈黙。信号待ちで車が停車する。

僕らは止まり、ビートルズだけが軽快に進み続ける。

相変わらず眠そうな声で四人組は歌っている。

ふと、窓から空を見上げると飛行機雲ができてるのが見える。

飛行機雲は嫌気がする程青すぎるキャンパスの上を横切る真昼に見ることができるときの唯一の筈だ。誰かの思いとか願いなんて、お構い無しに無感情に過ぎ去る時間軸の上を振り落とされて消えないうような必死にしがみつきながら、自由すぎる青空に白く真つ直ぐ伸びた足跡を残す。誰かが「自由なモノなんて何もない。鳥さえも空に繋がれている」と言っていたけれど、多分それは違う。

空は自由な場所だ。何者も縛り付けない。

この場所から見えている壮大な青空は、ちっぽけな僕らでは計り知れない程の痛みと苦しみを知っている。

そして、自由と悲しみの全部を包み込んで、僕らを慰めてくれる。

もしも、空が自由な場所でないのなら鳥はあんなに気持ち良さそうかわげがないし、飛行機雲があんなに爽快なわけがない。

それに、空は信号待ちもない。



信号が空の色に変わり、車が再び動き出す。彼女は相変わらず機嫌が悪いのだろう。いつも明るくてお喋りなのに、今日はあまり喋らない。会話が弾まなくて、なんだか気まずい。

西原の高速道路入口に差し掛かる所で彼女が突然口を開く。

「私達さ、もう別れよっか」

唐突な彼女の言葉に、またしても車内に沈黙が訪れる。

僕が一番聞きたくなくて、今まで必死に目を逸らしてきたシンプルで残酷な言葉が聞こえた気がする。

飛行機雲が見せてくれた爽やかな気分は一瞬で消えてなくなる。

世界から見た僕は、一色で何も変わらないかも知れないけれど、僕から見た世界はいつも七色で、ちよっとしたきっかけて、様々な色に変わる。青く澄んだ青空も悲しくなれば、一瞬で深い夕焼けの様な紅色に染まる。

車内のデジタル時計は午後二時三十七分を示している。マクドナルドを出発して七分経ったようだ。



高速道路入口の交通券を取って、車は空港方面に入る。

ここから先は停車することは許されない。

天真爛漫で、渡り鳥の様に自由な彼女だが、実は思慮深く、決して思い付きで行動を起こさ

ないことを僕は知っている。そのお陰で今まで何度も救われて来た。

「冗談？」 僅かな希望にかけて僕は訊ねる。

「ううん。本気」 静かにゆっくりと彼女は言う。

どうしてー？

なんで突然ー？

頭の中にいくつものクエツションマークが浮かぶ。

聞きたいことが沢山ある。

喧嘩はたまにするけれどそんなに傷つけることを言っただろうか。確かに悪いのはいつも僕だけだ。

むしろ、最近はお互いの会話の中に将来のことを考える話も混ざっていた気がする。間違いな

く僕らは上手くいっている。

それなのにー

あのとき、笑って僕の話聞いていた彼女の顔に嘘はなかったはずだ。

「そっか」

気の利いた答えが見つからなくて、僕はやっと一言絞り出す。

「好きな人ができたとか？」 あまり考えたくないけれど僕は訊ねる。

「ううん、そうじゃない」 彼女は首を横に振る。

本当にほんの少しだけど、ほっとする。

「一緒にいるのが嫌になったの？」 さらに僕は訊ねる。

質問攻めにしたら、彼女が嫌がるということはわかっているけど、一度聞きだしたら止まらない。

「そうじゃないよ」苦しそうに彼女は言う。

「実家のお店を継ごうと思って」

彼女の実家は熊本で和菓子屋をやっている。そのことは前から知っていた。でも実家がやっている和菓子屋を継ぐのは彼女の二つ年上のお兄さんだと前に話してくれた気がする。

「お兄さんが継ぐんじゃないの？」僕は訊ねる。

彼女は首を横に振る。

「兄ちゃんは今福岡の鉄道会社で働いていて、継ぐ気は無いって」

「でも、だからと言って別に今急いで継ぐ必要は無いんじゃない？ 大学はどうするの？ やめるの？」立て続けに僕は訊ねる。

せつかく三年間も大学にいたので、あと一年待って、学位を取ってからでも遅くないと思う。

彼女は僕と違って頭の回転も速いし、知識も豊富だ。中退するのはあまりにもつたいない。

それに、できることなら少しでも、ほんの少しでも良いから僕は彼女の近くで生活をしていたい。

「うん、やめる」あっさりと言った彼女は言う。

なんでそんな大事なことを相談してくれなかったのだろうか。

彼女はどんなに機嫌が悪いときでも、真剣な悩みや迷いなら僕の話をも必ず聞いてくれて、相談に乗ってくれる。

だけど、考えてみたら彼女自身の悩みや迷いは今まで僕に話してくれたことがない。歳が一つ

上で彼女なりに「プライドがあるのかも」と、今まで何も言わなかった。だから例え彼女自身に何かあったとしても、僕へ伝わるのはいつも物事が進んで、解決してからだだった。

「父さんがこの間、交通事故で手首を骨折しちゃってね。お店の方が追い付かないから手伝って欲しいって、母さんが」

お兄さんが今お店にいない状況の彼女の実家は、彼女のお父さんとお母さんが二人で切り盛りしている。そこにお父さんの骨折が加わると、人手が必要になるのは無理もない。

「それに、この間の地震以来やっぱりお店の景気が良くないみたいで、私が大学に通い続けるのは少しきついみたい」

僕はまた黙る。

お父さんが交通事故にあったことさえ知らなかったし、家が大変なことさえ彼女は僕に教えてくれなかった。

知らせてくれたとしても、地位もお金も無い僕には確かに何もできないだろう。けど、それでも話くらいは聞きたかった。

「ごめんね、急な話になって」申し訳なさそうに彼女は言う。

そんな彼女の横顔を見ると、僕は胸が締め付けられる。何か話題を変えて楽しい話をして、彼女には笑っていて欲しいと思う。

「それは仕方ないと思うけど、別れる必要はあるの？」

心で思っていることは違う尖った言葉が僕の口からこぼれ出る。

何だろう、さっきまであんなに楽しかったのに――

車内の居心地が悪くて、外の景色を少し覗いてみる。

いろんな色が混じり合う沖縄の街並みが見える。

止まっているはずの風景が僕らとすれ違い、走り去っていく。

窓から見える外の景色はパラレルワールドで、触れられそうなくらい近くにあるはずなのに開くことができない異世界だ。外の世界で何が起ころうともこっちでは何もできないし、こっちで何か起きて外の世界には何の影響も与えることができない。

僕にできることといえば、そのままの姿でいて欲しいと願うことくらいだ。僕が外の世界と関わるができるのは、終着地点に着いたときだけ。

そのときに、僕はいつも後悔する。あのときもっと優しくしておけば、頑張っていれば良かったとか。

でも、もうそのときには、僕には何もすることはできないし、世界は僕に何もしてくれない。



空港方面への高速道路はほとんどが無料区間なので、西原インターチェンジから乗れば、那覇空港間を160円で行くことができる。

車内は眠そうなビートルズが流れ続けている。

「さっきも言ったけどね、私は君のことが好きだし、たとえ物理的な距離が離れていても、できれば君の隣に居たいと思ってたの」彼女は少しだけ照れ臭そうに言う。

「ただね、君の隣に居ると居心地が良すぎて、本当につらくなって、そして怖くなる」本当につらそうに彼女は言う。

「つらくなって、怖くなる？」

僕も彼女の隣に居ると居心地が良いし、安心する。でも怖くなったことも、ましてや、つらくなったことは一度もない。

「君には大切なモノはある？」少し黙って、彼女は僕に訊ねた。

大切なモノ――

恋人から出された『大切なモノは何ですか？』という質問。

少し頭の中のごちゃごちゃした考えをクリアにして、そのことに集中して考えてみる。

大切なモノって何だろうか。自分の命、恋人、家族、友達、お金、名誉、失くしたくないモノは沢山ある。

もう少し絞ってみる。

多分お金と名誉は失くしても生きてさえいれば、取り戻すことができるだろう。それなら候補から外している。僕は色んな人に守られていて、そんな経験をしたことが無いから、実際に起こってみたら、どうなるかは分からないけど。

答えが出ない僕を見て、さらに彼女は続ける。

「この前、熊本で起きた地震のときに、私思ったの」

「何を？」僕はまた訊ねる。

三月月前、彼女の故郷を襲った震度七を越す大きな地震は彼女に何を思わせたのだろうか。

地震が起きたとき、彼女自身は沖繩にいて無事だったけど、なぜか僕は無性に心配でアルバイト先にいる彼女へ何度も電話をした覚えがある。

電話は返って来なかったけど、彼女はいつも通りの明るい顔して帰って来て、家族と友人は無事だったことを僕に伝えてくれた。二度目の本震のときも取り乱さずに、いつも通りの彼女だったことを覚えている。むしろ僕の方が取り乱していた気がする。

「地震が起きたとき、ちょうど私はテレビの前について、映っていたワイドショーのチャンネルで芸能人の不倫の話から突然緊急ニュースの画面に変わって、小さい頃から見慣れていた景色が壊れていく姿が映ったの。その景色が頭の中で東日本大震災のときの映像と重なって、あ、家族があそこにいる。死んでしまう。って思ったの」

冷静に話す彼女の横顔を見ていると、本心なのか分からない。

「熊本地震が起きるまでの私は、『死』というモノは概念としては知っていたけど、実感したことはなかった。だから家族や友達、大切なモノは簡単にはなくならないモノだと本気で思っていたの」

彼女は運転席に座っている僕の方を向いた。

「でも、人は必ず死ぬし、それは、ある日突然やって来る。段階を踏んでやって来るとは限らない。

私は地震のときにその当たり前にやつと気が付いたの。そして、それは私から大切なモノを奪う。多ければ多い程悲しみは大きいし、つらくなる。そして、いずれ私も連れていかれる。私も死ぬ。そのことを考えると死ぬことが本当に本当に怖くなった」

彼女は僕の方を見つめたまま続ける。

「そして、君のことを考えた」

「僕のことを？」

「今の私は、君のことがどんなに好きでも死ぬかも知れないという状況に陥ったらパニックになつて、隣にいる君のことなんて考えずにきつと逃げ出すと思つた。失くしたくなくて、大切なはずなのに」

「僕はむしろそうして欲しいけど」

本心から僕はそう言う。

本当に死ぬかも知れないという状況に陥つたときに感じる恐怖や不安は、多分当事者にしか分からない。

彼女の経験とは少しだけ違うかも知れないけれど、僕も『死』について実感した経験がある。

あれは確か、小学生の頃に親戚達と海水浴に行ったときだ。

少し沖の方で泳いでいた僕は突然大きな波にさらわれて、溺れてしまった。視界が一回転したことまでは覚えてる。うろ覚えで、どうやって助かったかは知らないけど、後から聞いた話だ



と従兄が溺れている僕を泳いで助けてくれたと母は言っていた。

多分人間は想像を超えた事態が起きたとき、心に感情や倫理は無くなって、ただ自分が生き残ることだけの為に行動する。それ以外は本当にどうでもよくなる。少なくとも僕はそうだった。

人はいずれ死ぬのだから別に恐れることではないのかも知れない。

でも、死ぬことを想像してみると本当に怖くなる。自我が消えて、一つの大切な何かが、今までも曲りなりとも積み重ねてきた何かが、大きな力で簡単に消されてしまうことは、ものすごく怖い。恐怖とは想像力から生まれる。恐怖はやがて水面に落ちたインクのように広がり、心の全てを覆い尽くし、体の内側から染み出し、心も肉体も動けなくする。できることと言ったら、震えながら目を閉じて暗闇に逃げ出して、恐怖が通り過ぎるのを待つことくらいしかできない。人のことを考える余裕なんて無いし、命を繋ぎ生存しようとすることは、生物の根源的な本能で別に恥じることでは無いと思う。

「でも、そうやって助かったとして、多分私は逃げ出したことを一生後悔して苦しむと思う。その苦しみとか後悔は、君のことが好きになればなる程大きくなる」彼女は話を続ける。

「だから私ね、そのとき決めたの。パニックに陥ってしまいうくらい困難な状況に遭遇して、自分の命が脅かされるくらい大きな恐怖が襲って来ても、まずは自分の命を守れて、せめて隣にいる人は助けられるくらいには強くなろうって。そのために準備していようって。なんかうまく言えないけどさ。だって、『パニックに陥ったから逃げ出しました』じゃ一生悔やむし、笑い話にも

ならないでしょ？」

彼女は大きな目で、僕の顔を見つめる。

「でも、でもね、大切なモノは近くにいないと守れない。どんなに頑張っても物理的に距離が離れていたら、何にもできない。私はね、多分一人の人間が本当を守ることができるのは、この両手が伸びる範囲が限界だと思う」

両手を前に伸ばしながら、彼女は言う。

彼女は考えすぎだ。考えすぎで、優しすぎだ。

でも、僕は彼女ではないから彼女の奥にある気持ちや考えの全ては解らない。本当はその場所にある気持ちが一番知りたいのに。

「そうかも知れないけど」

僕は何とか反論の言葉を探すけど、見つからない。

「私は君のことが好きで、本当のことを言うとは別れたくはないけど、今お別れをすれば多分まだ大丈夫だと思う。例えば私は熊本に帰って、君と付き合い続けたとしても、海を渡った遠い島で君に何かあったとき、私は君のことを守れない。そのことを考えながら、この数カ月生活してみるとなんだか本当に苦しくて、ものすごくつらくなった。これから先、私は君のことがどんどん大切になって、そしてつらくなる。だから、これ以上つらくならないうちに私達はサヨナラしよう」

彼女は少し笑ってから、そう言った。

運転しているからはずきりとは見えないけれど、彼女は少しだけ泣いている気がする。

考えてみたら、彼女は僕の前で泣いたことがない。多分僕に心配をかけない様に陰で苦しんでは、一人で泣いていたのだろう。

彼女が泣いているときに、僕は一体何をしていたのだろうか。

今だって車を運転していて僕は彼女と向き合うことすらできない。

言いたいことが山程ある。

心にある声をぶちまけたくなる。

でもやっぱり、どうしても彼女の泣いている顔は見たくない。

どうすればいいのか解らない。

何が正解なのだろう。

確かに『花に嵐のたとえもあるぞ』と先人達は教えてくれた。

でも、でもさ、恋人よ

サヨナラだけの人生は、あまりにも哀しすぎないだろうか。

車のスピーカーからビートルズの「Let It Be」が聞こえる。

車はいつの間にか、那覇空港の出発口の方に近づいている。

彼女を降ろしたらすぐに帰る予定だったけど、予定を変更して空港の駐車場に車を停める。

「いいよ、気を使わなくて」

彼女は僕に言うけれど、僕は構わず駐車する。エンジンを止めると同時にビートルズも止まる。ドアを開けて外に出る。僕は彼女のスーツケースを持って、空港の入り口を探す。

この話題は、もうやめよう。多分、今の僕には答えは解らない。きつと、答えは風に吹かれている。

彼女とはこんな深刻な話ではなくて、他愛もない当たり前で、くだらない話を沢山したい。



搭乗手続き締め切りまで残り五分を切っていた。

彼女は急いで自動チェックインカウンターで搭乗手続きを済ませる。手続きが済んだら少し時間があるので一緒にお土産を見て回る。

彼女は長い時間迷って、最終的に『紅芋タルト』を手取る。僕はいつも目に映ったモノを適当に選んでお土産に持つていくのだけど、彼女は決して適当には選ばない。受け取る側のことをしつかり考えて、一番喜びそうで、一番良いモノをお土産に選ぶ。

第三者から見たら、定番のお土産かも知れないけれど、このお土産は彼女が悩んで選んだ特別なモノだ。

僕は、そのことを知っている。

少しだけまだ時間があるので、彼女と空港のベンチに座る。

「はごろも祭りのときさ、やつぱり写真を撮っておけばよかったね」

彼女は僕の方を見ながら言った。

彼女は写真がとても好きで、僕と一緒に行動するときはずっとカメラを持ち歩いてた。

ただ、あの日の「はごろも祭り」のとき、彼女はカメラを忘れて来た。途中でそのことに気が付いた彼女は家に取りに帰ろうとしたけど、僕がそれを止めた。その日、彼女が遅刻したせいで花火に間に合わなくなる可能性があったし、それに僕は写真というモノがあまり好きではない。

写真は記録として残すことができるけど、大切なその一瞬を肉眼で見ることができない。なんだか少しだけ損じた気持ちになる。『今』というこの瞬間は、自分のこの目で見て、触れるべきだと僕は思う。

「写真のどこが良いの？」僕は彼女に訊ねてみる。

彼女は少しだけ考えて、答える。

「写真の良い所はね、本来はその瞬間だけのはずの思いとか風景を未来まで持つていって、他の誰かと一緒に共有できる所。時間旅行ができるという神様のルールを一瞬だけの写真なら破ることが出来る。そして失くしてしまえばもう戻らなくなった大切なモノを失くさないで済むことができるのだから君も失くしたくない大切な瞬間は必ず写真で撮っておいた方がいいよ」

優しく言う彼女を見ると、やつぱりお別れが嫌になる。

「そうするよ」僕はそう答えると、少し黙る。

こんな他愛もない話も、しばらくしたらできなくなる。腕時計を見ると午後三時を過ぎていた。

あと三十分で彼女は飛んでいく。

腕時計の秒針が一秒一秒確実に刻んでいく様子を見ながら時限爆弾を思い浮かべる。この一秒がいつか最後の一秒となり、もう二度と二人で笑うことも泣くこともできなくなる。

秒針の進む音がなんだか少しずつ心臓を指していく針のようで、嫌な気分がして、右腕の腕時計を外す。

腕時計を外した僕は、無言のまま窓の外の駐機場に見える飛行機を眺める。駐機場の飛行機は着陸したり、離陸したりと忙しい。

この場所から見える飛行機はなんだか生き物の様に、生き生きとした生命力を感じる。

空にいる飛行機の窓から見える景色が、僕はとても好きだ。

空から見える風景は、景色というよりも僕らが生きている地球そのもので、地球儀を上から眺めている様な錯覚を覚える。僕らが生きている場所は空から見るととても小さくて、四捨五入すれば全部同じだ。でも、穏やかで一様に見える青い海も近づけば複雑に入り乱れた流れや波があり、一つとして同じモノはないはずだ。

いつも見上げているどこまでも続いている様に見える無限大の空を捕まえたくて、飛行機は鳥よりも速く、高く、昇っていく。すると遥か上空にあったはずの白い雲は、いつの間にかずっと下にある。

飛行機が雲を追い越したときに、僕はいつも思う。

空を追い越した先は、一体どうなっているのだろうか。

空の上は青いのだろうか。

どこまでが空で、どこからが宇宙なのだろうか。

ただ、見上げた空はこんなにも奇麗なのだから、きっと見下ろしても、ものすごく奇麗なのだろう。

「そろそろ行くね」

彼女は立ち上がると、僕の方を見る。

「うん」

我に返った僕も急いで立ち上がる。

彼女はそれを見て、出発ゲートへと歩き出す。置いて行かれない様に僕は彼女の後を付いていく。



出発ゲートの前にたどり着くと、彼女は僕の方を見る。

「さっきは思い詰めて、いろいろ勝手に言っちゃったけど多分手続きとかであと一回くらいこっちに戻って来るはずだから、そのときもう一度ゆっくり話をしよう」落ち着いた声で彼女は言う。

僕は、一度決意した彼女の意思を変えることができるのだろうか。

ネガティブな気持ち湧いて来る。それでも、もう一度会えることを知った僕は、少しだけ嬉

しくなる。

「うん、もし何かあったら連絡してよ。待っているからさ」

僕がそう言うと、彼女も嬉しそうに頷く。

「ありがとう」

彼女はそう言うと、僕から視線を外して出発ゲートへと歩きだす。

彼女が僕にいつも言う「ありがとう」には一体どんな思いが込められているのだろうか。

知っているつもりになっていた世界は、まだまだ知らないことで溢れている。それが僕は嬉しくて、たまらなく寂しい。

彼女の姿が出発ゲートから消えていく。

ここから先は、僕が見ることも触れることもできない世界。

どこかの偉い誰かが決めた世界のルール。

ルールはどんなに頑張っても破ることができないルールと破ることができるルールとの二種類ある。

前者は『時間は巻き戻すことができない』とか『生まれたら死ぬことが決まっている』とか、

これらは彼女が言う神様が決めたルール。このルールのお陰で人間は命の有難みに感謝することができる。誰かを愛して、今を実感することができる。

後者は『誰かとの約束』や『交通ルール』とか、これらは人間が決めたルール。いつの間にか決まっただけで、平気で破ることもできるし、破らなくてもいいルール。



空港の出発ゲートはどっちだろうかー

なんだか変な感覚がする。

悲しみとは違う、喉に魚の小骨が引っかかった様な妙な虚しさが彼女との『サヨナラ』と入れ替わる様に僕の所にやって来る。



彼女を見送って、僕はお腹がすいたので空港内のハンバーガー屋に立ち寄ることにした。店員に注文を聞かれ何も決めていなかったことを思い出す。テーブルにあるメニューはどれも同じに見える。

適当にハンバーガーを注文する。

席を探し、窓際の駐機場の飛行機が見える位置に座る。

窓から見える飛行機は、さっきと同じはずなのにさっきの様な生命力がなく、寂しそうで機械的なただの乗り物に見える。

生き物と乗り物の違いはどこにあるのだろうかー

バックミンスター・フラーは僕らが住んでいる地球ですらも「宇宙船地球号」という乗り物だと言った。逆にジエームズ・ラブロックは地球のことを鼓動を刻む生命体『ガイア』だと言った。リチャード・ドーキンスに至っては、自意識があるはずの人間も遺伝子の乗り物であると言った。でも僕という人間には考えがあるし、自分の意志で行動している生き物であるはずだ。

もしかすると、生き物と乗り物に違いは無いのかも知れない。

あそこに見える飛行機も僕ら人間が認識していないだけで、実は一つの生き物として何か意思があるのかも知れない。

それに、もしかすると乗り物や生き物は目に見える存在だけじゃないのではないだろうか。

例えば、自分自身の生きがいを見つけたアメフト部の彼も無意識のうちにアメフト部という乗り物に乗って、アメフト部という生き物の一部として、存在価値をかけて戦っているのかも知れない。

僕と彼女の関係も、そうかも知れない。

恋人関係という生き物に乗って、事故に遭わないように呼吸が止まらないように気を付けながら、きつと今まで進んで来たのだろう。

それらはきつと、様々な犠牲と献身の上で、奇跡的な確率と絶妙なバランスで、かろうじて存在できているのだろう。

そして、予想外の角度からやって来た『何か』のせいで事故は起きることもある。そういう事故が起きた場合、ときには生命が存続できることもあるし、ときには存続できないこともある。

ただ、生命が尽き果てないように僕にもできることはあるはずだ。  
なぜなら、僕もその乗り物の一部なのだから。

そしてぎつとそれは、僕と彼女との関係だけじゃないはずだ。

僕らは鼓動を刻む余りにも大きな『世界』という乗り物に乗っている。その乗り物は決して止まることも戻ることもしない。

物理的に止まることはできても本質的には止まることはできない。

似ている景色は見ることでできても、まったく同じ景色は、もう二度と見ることができない。  
理不尽に進み、不平等に悲しみをまき散らす。戻ることのない毎日を日々過ごしながら、僕らは息を吸って命を食べている。そして遅かれ早かれ、乗り物だとしても生き物だとしても、いずれは必ず皆平等に終わりがやって来る。

だからこそ、過去の過ちや悲しみを学んで理解して、壊さないように、崩れないように『今』を愛して、大切にしなければいけない。

彼女が乗っている飛行機はどれだろうか――

できることなら安全で快適に、定刻通りに飛んで欲しい。

到着地の熊本もこと同じ様に眼が眩む程の快晴で、彼女の不安とかそんな気持ちを僕の代わりに遥か遠くに吹き飛ばして欲しい。

南の隅っこにあるサンゴ礁に囲まれた、美しい小さな島の空港のハンバーガー屋で僕はそんなことを思う。

ハンバーガーを食べ終わると、なんだかやることもないので、僕は那覇空港の中をぶらぶらする。夏休み前とはいえ、空港内は沢山の人で溢れ返っている。

この人達も何かの乗り物に乗って、いろんな考えを持って、いろんな価値観に触れてこれまでを生きてきて、これから先も生きて、そして、死んでいくのだろう。

少しだけ歩き疲れたので、目の前にあったベンチに腰かける。

僕という生き物である乗り物はこれからどんな道を歩いていくのだろうか。

僕が歩いて来た道を振り返れば失敗や挫折ばかりで、これから先どうなるのか不安になって、気持ち明けない夜の様な真つ暗闇に包まれるときがある。

だけど、それでもまあいいかと思ったりもする。

僕が歩いて来た道は挫折や失敗ばかりだけど、その道の途中で出会う人達は、いつでも必ず僕を助けて、楽しませてくれる。少なくとも、この小さな島で、今まで出会って来た人達はそうだったし、友人と一緒にいる今の日々は最高に面白い。彼女とは、この先どうなるのか分からないけれど、思い出の日々が楽しくて、充実していたことは間違いない。

彼らがいてくれるお陰で、僕は夜の暗闇も目を凝らせば小さな星が瞬いているということに気

が付ける。

それに、夜の色は黒というよりは青に近い。  
実に優しく、壮大な色をしていると僕は思う。

○

一人で考えていると、少しだけ眠くなってきた。

僕が眠ってしまっても、心臓は休むことなく常に動いている。

鼓動を刻み、全身に血液と酸素と生きる意志を送り続けている。

座ったままだと寝心地が良くないので横たわってみる。

僕という乗り物の鼓動の音が聞こえる。

実にちつぽけで、未熟な頼りない音をしている。

でも、一回一回確実に刻んでいるこの音は子守唄みたいで心地良い。

彼女の好きなビートルズの静かなリズムを思い出す。

なんだかか瞼が重くなる。

少しだけ眠ろう。

—楽しい夢だと嬉しいのだけど

意識がゆっくりと暗転する。

(終)

西上 正浩 (にしがみ まさひろ) / 琉球大学・理工学研究科博士前期課程二年

## 小説部門佳作

# 水中花

久保田 大地

1

玄関の扉を押し開けると、身体が躍るような湿度0%の灼熱の風が僕の脇を駆け抜けていく。夏の空気は、近所の小学生たちより余程健全快活だ。散髪したてで軽くなつた前髪が風に揺れて、一瞬だけ今世紀最高の気分になれる。

団地の五階というのは登るのは面倒だけど、この瞬間はまさにこの階に住む者の特権だ。廊下の手すりに身を乗り出せば、あの巨大な入道雲をよじ登って、首をどんなに回しても視界に収めきることのできない青空にそのまま吸い込まれてしまいそうな気になれるのも、最上階だからこそだ。

僕は六号棟を出て、遊具も何もない公園を横目に少し坂を上って、三号棟に向かう。容赦なく激烈な日差しが降り注ぐ公園ではいつものように膝丈ほどもある雑草とクマゼミだけが、騒めいていた。

首筋にガスバーナーを押し当てられているかのような焦熱を感じながら、人の気配のない団地の隙間を歩くのは悪くない真夏の午後の過ごし方だ。右手に提げている袋の重さを確かめる。ビーチサンダルのぺたぺたというリズムカルな響きが、耳に心地よい。

三号棟の四階、3-402。赤錆びた扉に「TAIR」と書かれたプレートが揺れている。Rの後ろにあるはずのAは、いつの日から剥けてしまっていた。

インターホンを押すと中から聞き慣れた声が出て、扉が開いた。金木犀のような香りが、外に溢れだす。

「はあい、あら湊太君、久しぶりじゃない」

「こんにちは。すみません、最近ちよつと忙しくて。でも今日は来ないわけにはいきませんから」僕はおばさんに、右手の袋を掲げて、ニツと笑って見せた。

「今年も何か持ってきてくれたの？毎年わざわざありがとうね。上がって、花夏も喜ぶわ」

お婆さんの頬に刻まれた皺が、暗い陰を横顔に落としている。

「もう湊太君も三年生だもんねえ。高校受験、これから大変なんじゃない？」

「そうでもないですよ。夏休み前に、早くお前は志望校決めろって、先生にどやされたくらいで」リビングを抜けて、短い廊下を横切る。

「花夏、湊太君が来てくれたよ。入っていいよね」

微かに、うん、という声が聞こえて、お婆さんが扉を開いた。金木犀の甘い香りが一段と強くなる。



僕は、一カ月ぶりに彼女と対面した。

○

彼女の部屋には巨大な本棚があった。その本棚には、ありとあらゆる紙媒体が収まっていた。図鑑や絵本、見たこともない難しそうな小説から少女漫画、果てはマップルの旅行マガジンや嵐のブロマイド写真集さえあった。他にはCDも、邦楽から洋楽、クラシックに至るまで様々なナンバーが揃っていた。今すぐにもTSUTAYAの支店が開けそうだ。

本棚に埋もれるようにして、木製の机も置かれていた。その上に二枚の写真立て。蝋燭の付いたケーキを前にする花夏と、白い味気ない壁をバックにお母さんと並んで立っている花夏。どちらの彼女も、写真に撮られること自体に興味がなさそうな顔をしていた。

初めて花夏を見た時の鮮烈な衝撃は忘れることができない。  
透き通るように白い肌。夏草の如く艶やかで、さらりと流れ落ちる黒髪。触れれば壊れてしまいそうなほど華奢な体。

花夏の大きな目はラムネの中のビー玉みたいで、やはり透明だ。そこに感情という色が映ることは、残念ながら滅多にない。

花夏は布団に横になったまま、ガラスの目で僕を見据える。薄暗い部屋の中で、彼女は今にもドライアイスの結晶のように、空气中に溶けて消えてしまいそうだった。触れたくても触れることのできないマイナス79℃の肉体を、ぎりぎり形として留めている状態が、今日で十五年目を迎えたことになる。

僕は右手の袋をぎゅっと持ち直して、部屋に足を踏み入れた。

「花夏、誕生日、おめでとう」

一切合切の思考を無理矢理飲み下して、代わりに渾身の笑顔を引き張り出す。

「何で一カ月も来なかったの」

思いがけない花夏からの問いかけに、僕は面食らった。せつかく苦勞して引つ張り出した笑顔が、大気圏に突入したかのような凄まじい重力に抑えつけられて、腹の下まで潜ってしまう。

「こーら、花夏。せつかく湊太君花夏の誕生日祝いに来てくれたんだから、そんな言い方ないでしょう」

おばさんはそう言つて僕に困つたような笑顔を見せ、お菓子持つてくるね、とそそくさとその場を後にした。

「ねえ、何で」

怒っているわけでも、責めているわけでもない。花夏は小さい子供のように、ただ聞きたいことを聞いているだけだ。

「ごめんごめん、一応もう受験生だしね。夏休みだからって、あんま浮かれてられなくてさ」  
ふうん、と花夏は僅かに顎を引く。

嘘、ごまかし、演技。この部屋には、まるでジェンガのように偽りが積み重なっている。部屋を満たす甘い空気も、計算されつくした室温も、花夏自身でさえも、そしてもちろん僕も。何もかもが薄っぺらで脆い、偽物だ。どれか一つでも積み木を引き抜けば、複雑に構築された

建造物がたちまちガラガラと崩れてしまいそうな危うさが、この部屋にはあった。

結局僕は、この部屋で絶対に崩してはいけないジェンガゲームに興じることになり、疲れてしまったのかもしれない。花夏に嘘をつき続け、自分を騙し続ける。いつしか花夏の部屋を思うと、僕の足は自然と鉛のように重くなるようになっていった。むしろそんな仮面舞踏会のような会合を、六年もの間やすやすと続けてきたことの方が、今から思うと信じがたい。

いや、僕らは最初から仮面を付けていたわけではなかったはずだ。花夏と初めて会った頃は、ただただ花夏と話すのが楽しかった。花夏の顔を見ているだけで幸せだった。いつから僕らは、互いの顔を仮面で隠すようになってしまったんだろう。

花夏には会いたい。これは本当のことだ。ただ、できることなら、本当の花夏に会いたい。でもそれはもう、花夏の体を蝕む病魔のせいでは叶うはずもない。

「でもまあ、そんなに花夏が僕に会いたって言うんなら、塾なんかサボっていくくらいでも会いに来るけどさ」

…塾なんて行ってもないくせに、よく言うよ。

気付けばまた、嘘をついてへらへらと笑っていた。何も言わなければいいだけなのに、沈黙が怖くてとっさに無駄口を叩いてしまう。

花夏は少し口を開いて、すぐにつぐんだ。その目が一瞬揺れるのを、僕は見た気がした。

「…いいよ、忙しいなら来なくても」

「それはまた急に冷たいなあ」

花夏の目はもうガラスに戻っていた。

「そんなことよりさ、今日は花夏に誕生日プレゼント持ってきたんだって」

僕は努めて明るい声を出す。花夏は胡散臭そうに、こっちを見つめるだけだ。

「なんだよ、もつと嬉しそうな顔しろよー」

「だって湊太のプレゼント、いつもセンスないんだもん」

「言つたな、こいつ。もう来年からあげねーからな」

まただ。また花夏の目が小刻みに揺れたように見えた。

「…そんなこと言つて、くれるのが湊太だもん」

花夏は薄いけれどふつくらとした唇を緩めて、そう言つた。

実際僕の心のこもつたプレゼントは、毎年彼女のお気に召すには至らなかつた。昨年あげた画材セットなんて、「私、絵は下手だから」と一蹴されたきり、一度も目にしていない。あれだつて部屋から一步も出ることのできない彼女のために、少しでも気を紛らわせられる趣味を提供できれば、という親切心の塊みたいな発想から思いついたプレゼントだったのに。

だから今年は、自分のエゴを押し付けることにした。

「はい、十五歳おめでとう」

花夏の布団の上に置いてやる。直方形に近い箱に、綺麗な水色のリボンが咲いていた。

「あれ、結構重たいね、これ」

僕は床にあぐらをかいて、花夏が細く白い指でリボンをほどこく様子を見つめていた。

出てきたのは、雫の中に閉じ込められた花だった。それは本当にそう見えるのだ。

清流から今まさに汲み取ってきたかのような水は、光に反射しなくても絹みたいにきらきらと輝いた。その輝きの中で凜と花開いているのは、白百合だ。花弁の滴るような白と、花粉の燦々とした黄が、目を射抜くほどに清冽に鮮やかだった。

しげしげと球体を見つめる花夏の横顔もまた、白百合に負けじと劣らず白い。

「…きれい」

花夏の口から言葉がこぼれ落ちた。僕は彼女を凝視する。どうせ、置いて見るだけなんてつまらない、とか真顔で言われるのだと覚悟していたものだから、何と答えればいいのかとあたふたしてしまう。

「それ、水中花っていうんだ」

「すいちゅうか…：…なんか哀しい響きだね」

その穏やかな横顔は、僕の見たことのない花夏だった。言葉の意味を考えるよりも先に見とれてしまう。

「…百合は夏の花なんだ。花夏にぴったりだろ」

花夏はいたく水中花を気に入ったようで、両手でしっかりと握りしめている。マイナス19℃の手でそんなに握ると、水が凍らないか少し心配になった。

だけど、水中花に込めた思いは言わなかった。

そんなこと、言えるはずもない。

「湊太」

「あ、えっ？」

突然名前を呼ばれて、僕は剥がれかけていた笑顔を急いで貼り付けなおす。

花夏は、手元の水中花をじっと見つめていた。

「何、どうしたの？」

「…私に、夏を教えて」

「は、夏？」

見たことのない生き物に突然遭遇したような、妙な緊張感と衝撃にぶつかって、僕は言葉を失った。

「教えてよ」

「いや教えてよって言ったって、なんで、そんな急に？夏なんて大っ嫌いって、花夏毎年言うてるじゃん」

「でも湊太は好きなんですよ」

「そりゃあ…まあ。やつぱテンション上がるし、夏が来たら、なんかこう、夏だあって気にはなるよね」

我ながらボキヤブラリーの稚拙さに情けなくなる。

「夏って何が楽しいの？」

何が楽しい。そんなこといきなり聞かれても。漠然と夏を思い描いてみる。僕は詩人でも工

ツセイストでもないから、的確な表現なんてすらすらと出てくるわけもなかった。

雰囲気。空気、音、匂い。頭を巡る夏の姿は、抽象的すぎて言葉として外に出せない。

うんうん唸っていると、花夏はしびれを切らせたようだった。

「なんだ、やっぱり夏ってそんな楽しいものじゃないんだ」

「違うんだって。こればっかりは……」

こればっかりは、体感してみないとわからない。

何よりも残酷なことを言ってしまったそうになって、僕は慌てて口をつぐんだ。日の光に当たることのできない彼女に、そんなことは口が裂けても言うわけにはいかない。

「……こればっかりは？」

「いや、何でもない。夏と言ったら絶対、青い空と青い海だな」

「そんなのどこの旅行パンフレットにも載ってるよ」

僕の回転の遅い脳みそが捻り出した陳腐なフレーズは、花夏によってぴしゃりと叩き落とされた。

「そんなんじゃないよ……」

「え？」

「そんなんじゃないよなくて、私は、湊太が見てる夏を教えるって欲しているの」

一言一言をしぼり出すように、花夏は訴えた。

僕は茫然と花夏を眺めることしかできなかつた。

「私は夏が嫌い。夏だ夏だって浮かれて楽しそうにしてる湊太も馬鹿じゃないのって思ってた。

でもそれは、みんなが太陽の下で一番輝いてる季節に、私だけ昼も夜も夏も冬もないこの部屋の中で、独りで闘わなきゃいけないから。何で私だけ、何で、って思ってるうちに、夏がどうしよもなく嫌いになっていつて…」

花夏の全身から感情という色彩が溢れだし、凍てつく部屋を明るく染めていくようだった。「…でもきつと、一日、たった一日だけでも、真夏の外に飛び出して好きだけ遊ぶことができたら、私もきつと夏が好きになれるのかななんて。湊太を見てるうちに、そんなふうに思うようになって。だから、湊太の目で見た夏を、教えて欲しかったのに」

僕は呆気にとられて、一言も発せなかった。花夏は自ら、高樓と積みあがったジェンガの一番下の積み木を、力いっぱい引き抜いたんだ。彼女は大きな目の淵に涙をいっぱい溜めて、口を真一文字に結んでいた。長く艶やかな睫毛に、雫が光る。

「花夏」

無性に名前が呼びたくなって、僕はようやくとその二文字を口にした。その二文字に、すべての思いを込めたつもりだった。それ以上は何も言えそうになかった。

花夏は今にもこぼれ落ちそうな涙をタオルケットで拭って、水中花に再び目を戻している。その手は怯えた小型犬のようにふるふる震えていた。

しばらく続いた沈黙の後に、「今日はありがとう」と花夏が消え入りそうな声で言った。ふぬけな僕は、これでやっと帰れると腰を浮かす。これ以上この空気の中には居座れそうもなかった。

「うん、じゃあ、もう行くね」



「…湊太、彼女とか、いないの」

どうしたんだろう。今日の花夏はとことんらしくなかった。今まで一度たりとも僕らはそんな話してこなかったのに。

「いないよ。何で、急に？」

花夏はもう完璧に仮面を付けていた。二酸化ケイ素の結晶となった目からは、やはり何一つ感情を読み取ることはできない。

「いつまでも私なんかにプレゼント渡してないで、彼女にでも渡せばいいのに」

僕は思わずふっと笑った。この憎まれ口が、いつもの花夏だ。

おばさんに見送られて、ビーチサンダルを足に引つ掛け、外へ飛び出す。その瞬間、身体が躍るような湿度0%の灼熱の風が僕の脇を駆け抜けていった。夏の匂いを心行くまで胸いっぱい吸い込む。散髪したてで軽くなつた前髪が風に揺れて、一瞬だけ今世紀最高の気分になれた。うまく口で説明なんてできやしないけど、これが、夏だ。

僕は夏に背中を押されて、激烈な日差しの中へ駆け出した。

## 2

僕は〈TAIR〉と書かれたプレートが揺れる赤錆びた扉を、ガンガンと叩いていた。

あの誕生日から四日後、午後十時半。ウンケーと呼ばれる旧盆入りが、今日から始まっていた。満月が闇を切り裂く夜だった。盆の訪れを告げるエイサーの囃子が、どこからともなく聞こえ

てくる。

呼吸が乱れ、滴り落ちる汗が目には滲む。夕飯で食べた炊き込みご飯が喉元までせり上がってくるのを、必死にこらえた。もう永遠にこの扉は開かないのかと思えた時、おもむろにガチャリという音がして金木犀の香りが外に溢れだした。

僕の荒い息遣いだけが、しばらく廊下に響いていた。

「あの、僕の母さんが、今さっきおばさんから電話があつたつて…あの…花夏は…」

おばさんはしばらく声を出さずに涙を流し続けていた。

「ごめんね、花夏はわかつたみたいなの…でも湊太君には伝えないでつて」

エイサーの隊列は、どんどん近づいてきているようだった。勇壮な太鼓の音や、地謡の独特な節回しの唄声に三線の音色が、鼓膜をじんじんと揺さぶる。

「花夏は湊太君に、あんな姿、見てほしくなかつたんだと思う。湊太君には…抜け殻になつた自分じゃなくて…」

おばさんは今や、夕立のように轟々と泣いていた。僕はといえば、もうありとあらゆる神経がぶつ壊れて、自分が泣いているのか、どこを見ているのか、何を聞いているのかさえ、わからなくなっていた。

「…喋つて、呼吸していた自分で…いたいって…」

へ主は白百合 ヤレホンニままならぬ マタハリヌチンダラカヌシヤマヨ

曲目は安里屋ユンタに変わったようだ。世界から音が消えて、安里屋ユンタだけが穏やかに

僕の中を通り抜けていく。

そして僕は、白百合を見た。清流の中に燦然と花開いた白百合を。僕は震える手を空中に差し出す。おばさんが僕の手の中に、水中花をごとりと置いた。重み。きつと、花夏の命よりも重たいんだ。

「これ、湊太君に持っていてもらいたいって。この白百合を私だと思つて、色々なところに連れていってほしいって、花夏言つてた……だから渡すね。もう、今夜は一人にさせてもらつていいかな。おばさんも少し、疲れちゃつたみたい」

おばさんは涙と鼻水でぐしょぐしょの顔を、にこりとして見せた。でもそれは、今まで見た中で一番やわらかで、若々しい笑顔だつたと思う。

赤錆びた扉が、僕の鼻先で閉じられる。締め出された金木犀の香りは、すぐに月明かりの中に溶けていった。

へサー沖繩いとこ一度はおいで　サーユイユイ

遠ざかつていく安里屋ユンタの音頭を、僕はその場に膝を付いたままいつまでも追いかけていた。

○　　どうやって自分がここまで来たのか、全く思い出せない。気づいたら僕は、真夜中の誰もいない浜辺に足を踏み入れていた。

静かな夜だつた。水面に月光を映した海は、極楽の入り口のようにさらさらと輝きもしたが、地獄の入り口のようにぬらぬらと蠢いてもいた。

砂に足を取られつつ、僅かな月明かりを頼りに、如何ともし難い魅惑を放つ母なる海を僕は目指した。夜の浜辺には、いざなうような波音だけが悠然と響いている。まるでそれ以外の雑音が入るのを許さないかのようだった。

全く意識せずに僕は足を濡らしていた。冷たさという温度を感じる。波が、優しく僕の踝をなでてくれる。そして、海に全身の力を吸い込まれたみたいに、その場にばしやりと座り込んだ。心は、空っぽだった。

境界のない無辺世界を永遠と堕ちていく感覚。その世界には明るい暗いという概念もなければ、上下左右の概念もまた、存在しない。だから堕ちていく、と言うより、ただそこにいる、と言ったほうが正確かもしれない。

花夏が死んだ。

文字にすればたった六文字の出来事。僕はその六文字で、いとも簡単に壊れてしまった。自分という一つの生命体が、くしゃくしゃと徐々に潰れて元に戻れなくなっていくのが、意外と冷静に判断できる。花夏が自分の命が削られていくのを認識していたように、僕もまた、自分の心の崩壊を認識していた。

こんなにも、人間は弱いのか。全く予想できなかった事態じゃない、むしろその可能性を常にとどこかで恐れていたのに。それなのに、こんなにも、受け入れられないものなのか。こんなにも、赤の他人の死が苦痛になりうるものなのか…。

手に握った水中花を満月にかざしてみる。眩しいほど白い肌。花夏は小さなガラスの中で黙

ったままだ。

ねえ、もつと沢山話したいことがあつたんだ。

もつと花夏を、見ていたかつたんだ。

夏も教えてあげるし、夏だけじゃなくて、冬も、春も秋も、外の世界の本当にいろんなことも教えてあげるから。

また得意の憎まれ口を聞かせてよ。

ねえ、花夏、何か、何でもいいから答えてくれよ。

頼むよ…頼む。

白百合は素知らぬ顔で、冷ややかに咲き誇っている。水の中に咲くその花には、決して触れることはできない。

わかっている。彼女はあの時の僕を恨んで、そっぽを向いているのだ。夏を教えると言われたときに、花夏の思いを受け止めずに逃げ出した僕を。

口で説明する必要なんてなかった。ただ触れたら壊れてしまいそうな身体を抱き上げて、外に連れ出せばよかった。夏は、こればかりは、体感してみないとわからない。夏の日差しを思うさま浴びて、二人で笑って、その結果花夏がドライアイスの結晶のように空气中に溶けて消えてしまったとしても、それでよかったんだ。花夏はそれを望んでいたはずだった。

ごめんな、花夏。

僕は砂浜に倒れた。細波の音が、さつきよりも近くなる。ふくらはぎのあたりまで、海水が

押し寄せてきては、引いていく。

そういや、好きだつて一度も伝えてなかったな。

でも、もう、いつか。

目を閉じて、視界から夜空を追い出した。そして僕は、本当の無辺世界へと墮ちていった。

○

肩を叩かれた気がした。

どれだけの時が流れたんだろう。目を閉じていた時間が、一瞬にも永遠にも感じられた。

僕は砂浜で気を失うように寝てしまったようだ。手足を動かさなくても、体が軽いのがわかる。

まだ、目を閉じていたかった。むしろこのまま二度と開かなくなつてかまわない。もう僕が見

る世界に、花夏が映ることはないのだから。もう、二度と。

再び肩を叩かれた。

僕のことを見つけた誰かが心配してくれているんだろう。でも起きたくない。何も見たくない。

ほっといてほしかった。

「大丈夫です」

僕は声だけで、自分が無事であることを相手に伝えた。だがその人が動く気配はない。

「湊太」

瞬間、僕の中で時が止まった。

今確かに名前を呼ばれた。ありえない、そんなことは絶対にありえない、のに、その声は紛

れもなく――。

「いつまで寝てんの。全然大丈夫じゃないよ。もうお昼近いよ」

幻聴だ。花夏を失ったショックで頭がおかしくなってしまったのかも。でなきや、死人の声がこんなに鮮明に聞こえるはずがない。

「ねえ、起きてよ、湊太！」

「やめてくれ！」

僕は一思いに目を開いた。自分の脳にわからせてやらなければならぬ。花夏がそんなふう  
に話しかけてくることは、二度とないのだと。花夏はもう手の届かないところへいつてしまっ  
たんだと。

僕の目には何も映らない。はずだった。

「なんで……」

彼女は、大理石の彫刻のような細い足で、地面にしつかりと立っていた。雲より軽そうな白  
いワンピースの裾が、夏風にそよぐ。

日の光の眩しさに、思わず目を閉じた。

やっぱり僕は狂ってしまったんだ。花夏は死んだ、死んだんだ、言い聞かせなきや。

「花夏……どうして……」

「勝手に死んで、ごめん」

手で掴めそうなくらい、はつきりとした肉声だった。命に代えてでも、もう一度だけ聞きた

いと願った、花夏の声。ぶつきらぼうな口調に思えて、嫌な感じはしない。かと言って柔らかな口調でもなく、冷たい口調でもない、不思議な響き。

「でも、一日だけ戻っていいって、言われたんだ。お盆だから、今日だけは」  
何を言っているのか、全然わからない。

「：幽霊、だつて言いたいの？」

「んー、ちょっと違うけど：まあ、そんな感じ」

花夏はそう言つて、燦々と降り注ぐ日光の中で、嘘みたいに晴れやかに笑つていた。

沖繩の旧盆は三日間だ。一日目は先祖の霊がこの世に戻つて来るとされるウンケー。二日目はナカヌヒで、最終日は霊をあの世に見送るウークイの日と呼ばれている。

花夏はウンケーの日に死んだから、一日だけこの世に戻つて来れた。ということらしい。

そんな馬鹿なーと、僕は立ち上がりかけて気づいた。地面が砂じゃない。昨夜、確かに踏みしめたはずの白砂は見る影もなく、代わりにぬるりと黒光りするアスファルトの上に、僕は座り込んでいた。

考えるまでもなく、ここは見慣れた西原住宅の三号棟一階だった。紫外線で焼け焦げたように錆びついた赤いママチャリが、駐輪場の壁に気怠そうにもたれ掛つている。

「教えてよ」

「へ？」

「今度こそ、私に夏を、教えてよ」



どこまでが現実で、どこからが夢で、何が本当で何が嘘なのか。

「もう、いつまで座ってるの。一日しかないんだよ」

花夏は軽い足取りで歩き回りながら、ママチャリのハンドルを握ったりしている。

「湊太、今日は何日？」

「今日？あ、えっと…八月三十一日だけど…」

「ほーら、ぼーっとしていると、夏終わっちゃうよ」

…あ、明日から二期か。

ふいに蝉の声がふくらんだ。世界に花夏の声以外の音があることを、しばらく忘れていたのに気付く。

明日だって、明後日だって、きっと暑いのに。なのに、夏休みが終わると夏が終わってしまう気になるのは、何でだろう。

宿題終わってねーやとか、どうでもいいことが思い浮かぶ。花夏はもう、ブルーのサンダルを弾ませながら坂道を下ろうとしていた。

僕は深呼吸して立ち上がる。

何事もなかったかのようにまた、夏が終わる日が始まっていた。

○

白いワンピースを追いかけているが、僕は歩いていた。

花夏はまばゆい光の中にも、溶けて消えてしまうことはなかった。普通の女の子と同じ

ように自分の足で道を歩き、おしゃべりをし、笑顔を見せる。僕はこの奇跡をゆっくりと受け入れていた。

「私、今日やりたいこと、あるんだ」

「やりたいこと……」

花夏の薄い唇が動くのを、僕はじっと見ていた。十五年間、一度たりとも満足に外に出ることが叶わなかった、彼女のやりたいこと。身近にいたはずなのに想像もつかなかった。

「湊太が見てた景色を、見てみたい。ずっと、そう思ってた」

夏の午後の風が、花夏の黒髪を静かに巻き上げた。

「部屋の窓からね、湊太が毎日学校に行くの、実は見てたんだ。今日はでっかいカバン持って学校で何するんだろうな、とか。焦って走って遅刻しそうなんだ、とか思いながら。でも、私の世界はたったそれだけ。窓に切り取られた世界から湊太が消えたら、それでおしまい。湊太には無限の世界が広がっているのに、何で私は……って勝手にいじけたりして」

たまに、彼女の言葉を聞いていると、僕は自分のことがどうしよもなくくだらなく思える時がある。僕には花夏と違って自由がある。やろうと思えば何でもできるはず、なのに。花夏が生涯を閉ざした十五年間と同じ十五年間で、僕は一体何をしてきたんだろう。

「風って、気持ちいいね！」

花夏につられて、僕も空を見上げる。巨大すぎる入道雲の前に、あまりにもちっぽけな僕ら。

「こんな広い空の下にいたら、悩みなんてどうでもよくなっちゃうね」

「…そうかも、しれないね」

僕らが夏の空に、小さな悩みをまるで紙飛行機のように飛ばして楽になつているとすれば、暗い部屋の中で飛行機を飛ばせられなかった花夏は、悩みを溜めに溜めこんで、そのまま消えてしまったのかもしれない。

住宅街が千切れて、徐々に畑の景色が増えてくる。この辺りが西原町の原風景なのだという。二次大戦前までは、西原町は沖繩でも一位二位を争うさとうきびの産地だったらしいけど、六十五年も前のことなんて大昔の出来事だ。

「すごい、この道行くの？」

花夏が立ち止まったのは、さとうきび畑の真ん中を切り拓くように伸びるあぜ道の入り口だった。僕らの背より優に高いさとうきびが、燃えるように緑の葉を風になびかせる。

「裏道なんだけど、こっちの方が近いんだ」

花夏は僕を追い抜いて、緑の中に飛び込んでいった。

不思議な景色だ。

一本道なのに、方向が分からなくなる。見上げれば、緑の葉と葉の隙間に横たわる細長い空が、まるで小川のように流れる。

「わあ、海の中を歩いてるみたい。さとうきび畑ってさ、海みたいじゃない、ねえ湊太」

「花夏、ほんとの海を見たことあるの？」

「あー、ひどいこと言うね」

目をつぶると、風の音が聞こえてくる。さらさら、さらさらと寄せては返す波のように。

「ほんとの海はさ、もともともっと広いんだ」

「そんなの、わかってるよ」

「いや、わかっちゃいない。自分の目で見なきゃ、絶対にわからないよ、海の広さなんて。今日、見せてあげるからさ」

「…じゃあ、楽しみにしとく」

花夏は軽そうな体をふわりと浮かして、走り出した。

「湊太ー！早く来なよ、海まで行くんでしょー！」

彼女が振り向いて、大声で叫ぶ。一瞬本当に、花夏がそのまま白い光の中に溶けてしまうかのように見えた。

ぼつり、と肩に何かが落ちた。空を見上げた花夏の頬にも、大粒の水滴がはじける。

「…やばい、雨だ」

気づけばどこから湧いてきたのか、真っ黒な雲が僕らの上空に這い寄ってきていた。分厚い雲の天井は、背伸びをすれば届きそうなくらい低い。すぐにザーという音が背後から聞こえてきた。

「すごい…雨が近づいてくるよ…」

花夏の言葉は正しかった。とんでもない勢いのが、まるでカーテンを引くように近づいてくる。

「走ろう！僕に付いてきて」

迫りくる雨との競走だった。さとうきび畑が、滝のような雨に次々と呑みこまれていく。

大量の水が地面に叩きつけられる、凄まじい轟音。

「湊太、だめ！追いつかれる！」

「がんばれ、あと少しだから！」

道路に出て振り返ると、まっすぐ続くアスファルトの色が、みるみると黒く染まっけていく。

雨は速かった。ついに花夏が巻き込まれ、すぐに僕も捕まる。体に打ち付ける重たい雨は、まるで弾丸のようだった。わあああと吠えながら、走って、走って、飛び跳ねた。

「花夏、もう着くよ！」

「えー？なにー？」

「だから、もう着く…ほら、着いた！」

角を曲がってすぐの商店の扉をガラガラと引いて、僕らは転がるように店内に飛び込んだ。

服も頭も、びしょ濡れだった。僕は髪を片手でかき上げて、犬みたいに一度身震いする。花

夏はワンピースの裾を両手で絞っていた。

肩で息をしながら僕らは顔を見合わせる。そしてどちらともなく、笑いだしていた。

「ああ、怖かった。けど、楽しかった！」

「すげえカタブイだったなー」

夏にはこんなカタブイが、一日で三回くらい平気でやってくる。

商店の中にはくぐもったカタブイの音と、僕らの笑い声と、掛け時計の秒針が進む音しかし

なかつた。

「ここは？」

「僕らが学校終わりによく寄る宮城商店。こんな小っちゃいけど、意外と何でも扱ってて、安いんだ」

目の前の棚にはどこにでもあるスナック菓子から、輸入品のチョコレート、ムーティーやタンナーファークルまで、色とりどりのお菓子が所狭しと置かれている。向こうの棚には埃を被っていたり色あせてはいるけど、洗剤やキッチンペーパーだつてある。

「せっかくだから、なんか買ってこようよ。僕は喉乾いたから、さんちゅうでも買おうかな」  
「さんちゅう…つて何？」

僕は店の奥のクーラーボックスから凍っていないチューペットアイスのようなものを取り出す。

「これ。中身はめっちゃ甘い紅茶みたいなやつんだけど、僕らはけっこうこれ飲むんだ。三十円だし」

僕らはレジ台に二人分のさんちゅうとスイカバーを並べた。

「あ、私、お金…」

「いいよ、まさか幽霊に出させるわけにもいかないし」

ポケットから財布を取り出して、僕は「すいませーん」と奥の部屋に声をかけた。でも返答がない。

「あれ、おかしいな。いないのかな」

「お金置いておけばいいんじゃない？それで今度来たときに言っておけばさ」

「いいかなあ、それでも」

仕方なく代金を置いて、商店を出た。庇の下、公衆電話を挟んで、僕らは隣に並ぶ。なんとなく間に挟んでしまった公衆電話の距離が、とてつもなく遠く思えた。

「雨、やまないね」

「やまない雨なんて、ないよ。それにカタブイならすぐやむさ」

○

スイカバーを齧っていると、一筋の日差しが道路に落ちた。とたんに雨足も遠のいていく。「あ、やみそう」と花夏が言ったときには、もうほとんど雨は上がっていた。カタブイは降るのもやむのも突然だ。

濡れた路面に一步足を踏み出すと、雲が切れて洗いたての太陽が世界を眩しく照らし出した。民家の雨どいを伝う水が、さらさらと滴る。溶けだしたスイカバーのかけらが、夏空を映す水たまりに落ちて、波紋を作った。

「すごい、さつきと全然違う景色を見るみたい……」

「空気がゼロになった気がするだろ」

「空気が……ゼロになる……」

「感覚だよ、感覚。僕はいつも、そう思うんだ」

花夏は真剣な顔で頷いた。

「わかる。すつごくわかる。空気も、風も、空も、みんなゼロになってる」

「だからさ、夏なんて絶対、口だけじゃ教えらんないんだ。自分で見て、感じなきゃ、わかんないんだよ」

僕は夏の匂いを、心ゆくまで胸一杯吸い込んだ。花夏も小さな胸をふくらまして、息をつく。風が傍らをさらりと通り抜けていった。

うまく口で説明なんてできやしないけど、これが夏だ。

「花夏、海行こう」

「うん！」

白い石垣を上るかたつむりを横目に、僕は歩きだす。

海はもう、すぐ近くだ。

○

「湊太まだー？」

「あとちよっと」

目をつぶりながら階段を上る花夏の手を引く。花夏の手は思っていたよりずっと小さくて、やわらかくて、思っていた通りひんやりしていた。

「よし、あと二段」

「…これで一番上？」

西原海浜公園には、丁度おわんを伏せたような形の不思議な山がある。両側に階段が付いていて、



頂上にはベンチが二つ並べられた狭い展望デッキになっている。

「いいよ、目開いて」

花夏の長い睫毛が二度、上下に揺れる。一步、もう一步と、彼女は眼下に広がる海に近づいていった。

「これが…」

「海、だよ」

その青は、どんな青よりみずみずしくて、眩しい。この海をきれいなんて言葉で片付けることなんて、到底できない。だから花夏もしばらくの間何も言わずに、ただ真っ直ぐに海を見つめていたんだろう。

僕はベンチに腰を下ろして、斜陽に照らされる西原の丘を眺めていた。隣のベンチに座った花夏の、風にたなびく後ろ髪が視界の端に映る。一瞬、海の匂いの中に金木犀の香が溶けて、流れていった。

「花夏…」

花夏は足を抱えて、じつと目の前の海から視線を逸らさない。僕は溢れかけた言葉を飲み込んで、丘に目を戻した。

クマゼミの喧騒を縫うように、かすかに細波の音が届く。

「私ね、ほんとはいつ死んでもいいと思ってた」

花夏の声は僕の反対側に転がって、消えていく。

そんなこと、知っていた。

だから僕は、花夏の部屋に行くのが怖かったんだ。花夏が自分の終わりを望んでいると、その口から聞かされるのが怖かったんだ。

「ずっと、自分は何の意味があつて今生きているんだらうって考えて、わからなかった。でも今思うと、甘えてたんだと思う。外に出られない私は何にもできないんだっていう、自分で作り出した逃げ道に」

「逃げ道……」

「外に出れなくなつて、やろうと思えばいろんなことができる。それに私は夜や曇りの時なら、外に出れたはずなのに。いつの間にか外の世界が怖くなつて、外に憧れてるくせに、勝手にあの部屋から出れなくなつた。病院の先生が言つてたの。一番大切なのは、心だつて。心が前向きで健康ならなんだつてできるし、病気だつて、もしかしたら治せるかもしれないつて」

「そんなの……そんなのそれこそ嘘じゃん……医者は自分たちじゃ治せなかつたくせに」

丘の上の空は徐々に朱色に染まりつつあつた。花夏の目にはどんな色の海が映っているんだらう。僕らの視線が決して交差することがないように、すぐ隣にいるのに互いに反対側の景色を見ているように、僕らの人生は交わつていたやうで実は、何一つ繋がつていなかったのかもしれない。「先生が言つてたことは、正しかったよ。私はとつくに心が折れてたから、やっぱり死んだんだもん」

「そんなこと軽く言うなよ！」

「もう何もかも遅かったの」

花夏の声が、夕焼けに彩られた空気を揺らす。

「死ぬ間際になって初めて、死にたくないって思った！もっと生きたいって思った！こんなで終わったなら、ほんとに何のために生まれてきたのかわからないし、それに…最期になって…湊太のことが、頭から離れなくなつて…」

僕は気づけば唇をきつく噛んでいた。花夏の痛みや苦痛が、直接僕の中に入ってくればいいのに。唇に残るこんな小さな痛みだけでは、花夏の痛みに触れることすらできない。だから花夏は、僕の目の前からいなくなつてしまつたんだ。

「海行くよ」

「え？」

僕は立ち上がつて、花夏の背中をぼんと押した。

「まだ行つてないだろ、海。見てるだけじゃ、行つたことにはなんないよ」

花夏の目は濡れていた。水中花のように、きらきらと澄み切つた目だった。

「ほら、夏を教えるって欲しいんだろ？ぼーっとしてると、夏が終わっちゃうぞ！」

階段を駆け下りる。後ろから「待つて」と足音が追いかけてくる。最後の五段は弾みを付けて、一気に飛んだ。風になる感覚。

海の上では、何事もなかつたようにもう夜が始まるうとしていた。

○

僕と花夏は砂浜を駆け下りて、同時に細波の中に足を踏み入れた。しぶきが膝を濡らして、花夏が楽しそうに叫ぶ。

「湊太、夏って、最っ高だね」

けれど、その顔から笑顔が消えるのも、あまりに突然だった。

「…花夏？ど、どうかした？」

「…ごめん湊太。湊太にずっと、嘘ついてた」

「嘘…？」

暗くなり始めた空の下、花夏の表情は影になってよく見えなくなってきていた。

「湊太、ごめん、許して。ほんとはこんなこと、しちゃいけないかった。でも私、湊太と一日でいいから、どうしても一緒にいたくて」

西原の丘に今にも沈んでしまいそうな太陽が、これで最後だと言わんばかりに花夏の顔を照らした。

「実は、私が旧盆のおかげで湊太の世界に戻って来れたんじゃないの。ほんとはその逆。湊太は、今日陽が沈む前に自分の体に帰らないと、もう二度と、戻れなくなる…」

「え、僕が？戻れなくなるって、どういうこと？」

花夏はほとんど泣き叫びそうな勢いだった。

「もつと早くお別れするつもりだった…でも、今日が楽しくて、楽しくて、言い出せなかった…」  
花夏が震える指を上げる。振り向くと、海の上に白い部屋のようなものが見えた。

「なんだ、これ…」

部屋の壁が次第に濃くなっていく。その部屋は病室のようだった。

ベッドの脇には白衣の医者と看護婦が一人ずつ立っていて、彼らに見下ろされるようにベッドに取りすがっているのは、僕の母さんと父さんだった。

母さんは泣きながらベッドに横たわる人の手を握っていたが、その人の手は握り返す力も、最早自分で呼吸する力さえも、ないようだった。顔には人工呼吸器が取り付けられ、体のどこからか伸びている管が、ほとんど反応を示さない心電図に繋がっている。

それが僕だった。

ベッドに抜け殻のように横たわっているのが、紛れもなく、僕自身だった。

花夏の言葉が頭の中でつながる。

そうか、僕は昨日海で倒れて…でも目覚めたのは団地の一階で…花夏が死んだ日は確か満月だった…ということはあの夜海は満潮に…。

花夏を見る。花夏は目に涙を浮かべながら、必死に頷いていた。

僕は病室から、自分の抜け殻から逃げるように、花夏に一步近づいた。

「帰りたくない」

「えっ？」

花夏の小さな肩に手を置く。その時になって初めて、僕の手も花夏の肩も、透けてきていることに気が付いた。

日が落ちようとしていた。

「好きだ」

今にも闇に溶けてしまいそうな花夏と目が合う。花夏は目を逸らさなかった。だから僕も目を逸らさなかった。

花夏の瞳から水滴が流れ落ちて、頬を伝う。

「だめ、湊太……」

「せっかく本当の花夏に会えたのに、もう別れるなんてあんまりだ！死ぬんだったら、それでもかまわない！それで花夏と一緒にいれるなら！」

「馬鹿なこと言わないで！」

肉体としての体の重みが、徐々に失われていくのがわかった。花夏の肩の丸みも骨の固さも、僕の右手から感覚が消えていく。

振り返ると、病室は暗い海のように消えていこうとしていた。がつくりと頭を垂れた父さんと、僕をかき抱きながら肩を震わす母さんの姿が、遠くなっていく。

「私も、ずっと湊太と一緒にいたかった……」

すぐ近くで声がした。頬にやわらかな唇の輪郭が触れる。そしてそのまま、強い力で胸を押された感覚があった。

倒れる。

まだぎりぎり残っていた体重が、海面に引き寄せられた。

そして僕は目を覚ました。

3

僕は「TAIR」と書かれたプレートが揺れる赤錆びた扉の前に立っていた。外に出るの  
は数か月ぶりだ。退院した後、直射日光を浴びると眩暈がして、脂汗がでて、まともに立つて  
もいられなくなっていた。

インターホンを押すと、中から答える声がして、扉が開いた。かすかに金木犀のような香りが、  
外に溢れだす。この香りをかいただけで、僕は喉の奥をぐつつかまれたような気分になった。

「…湊太君、久しぶりね」

おばさんのやわらかな口調は変わっていない。

「あれから一度も顔出せなくて、すいませんでした。なんていうか、その…」

「いいのよ。さあ、上がって上がって」  
おばさんの後に付いて、リビングに入る。まず目に入ったのはリビングにほとんど違和感な  
く収まっている仏壇だ。

黒い額縁の中の花夏は、写真に撮られることそのものに興味がなさそうな顔をして、どこか  
僕には見えないものを見ようとしていた。

線香を焚いて、手を合わせる。

飲む？と差し出されたガラスのコップに入ったさんびん茶を、いただきますと受け取って、

口に含んだ。

「今日来てもらったのは、秦太君に渡したいものがあるからなの。変なこと聞くけど、湊太君花夏と二人で海に行つたことある？」

「え、海、ですか？」

僕は思わずさんぴん茶をむせそうになる。

「いきなりそんなこと言われても、意味わかんないよねえ」

苦笑するおばさんに、僕は何と言えぱいいのかわからなかった。

「ちよつと一緒に来てくれる？」

椅子から立ち上がつて、リビングを抜けて短い廊下を横切る。どこに向かつているのかは明白だった。

僕は耐えきれぬだろうか。あの部屋を目の前にして、平然と立っていられる自信は全くなかった。

おばさんが扉の取っ手に手をかける。開いた瞬間、涼しい風が僕の頬をなでた。

「あ……」

部屋の窓は開け放たれていて、そこから夜風が吹き込んでいる。そして部屋には、思い描いていた丈の低いベッドも、巨大な本棚もなくなつて、ただ部屋の広さだけが際立っていた。

「つい最近まで部屋の中、ずっとそのままにしてたんだ。片付けるのも辛くて」

おばさんがそう言いながら部屋の電気を付ける。ただ一つ、ぽつんと取り残された木の机が照らされる。



「ふと気づくとこの部屋の扉を開けて、いるはずのない花夏の姿を探してた…我に返るたびに、ほんとは死ぬほど寂しくて虚しくなった。だからね、思い切ってもう部屋にあったものほとんど処分したの」

お婆さんはそうやって変わろうとしたのだ。

「そしたら、机の引き出しで見つけたの」

「…何を、ですか？」

「湊太君、開けてみて」

ぼつんと残された木の机。何が出てくるのか、想像もつかない。

僕は恐る恐る取手に指をかけて、がらりと引いた。

そこには、海が広がっていた。

「これは…」

「ね、すごいでしょ」

引き出しの中に入っていたのは、一枚の絵だった。画用紙に鮮やかに切り取られた、夕焼けの海と砂浜。波打ち際まで今まさに走り込んできたように見える二人は、なんの悩みもないまっさらな笑顔だった。

花夏には、こういう風に見えていたんだ。あの日、あの時の海が、こんなに綺麗な色で、こんなに鮮やかに、こんなに楽しそうに…。

…ありがとう

…湊太のおかげで、夏を大好きになれたよ

耳元で声が聞こえた気がした。

おばさんが絵を引出しから取り出す。画用紙の下には使い古してぺちゃんこになった絵具やパレット、だいぶ短くなった色鉛筆が、ぎっしりと詰め込まれていた。

「湊太君からの誕生日プレゼント使って描いたんだね。何度も何度も、練習したのよ、きつと」僕からの誕生日プレゼント？

画材セット…。

水中花の前の年にプレゼントしてから、一日も使っているところを見なかった、あの画材セットだった。

僕は床に膝を付いた。立っていられなかった。涙が握りしめた手の甲に、ぼたぼたと落ちる。

「あんまり綺麗だから、花夏は本当にこの景色を見たんじゃないかと思っちゃったんだけど、ありえないもんねえ。でも、私は嬉しかったんだ。花夏が自分の顔を、こんなに楽しそうに描けるんだってわかったから。遺影の写真なんかより、こっちの方がずっと綺麗なもの」

おばさんは微笑みながら、絵を僕に差し出した。

「え…これは、受け取れ…ない、です」

「私だってほんとは渡したくないのよ。けど、ほら」

おばさんが冗談っぽく笑う。僕は震える手で絵を受け取った。涙を必死に拭いて、ひっくり返してみる。

大好きな湊太へ 夏を覚えてくれてありがとう

「やっぱり花夏のおんなに楽しそうな顔は、湊太君がいなきや見れないのね。ちよっぴり悔しいけど」

お婆さんの声が遠のいて、僕は再びあの砂浜に立っていた。

小さな肩に手を置いた。手や肩が透けて、右手の感覚が消えていく。花夏の輪郭、頬に触れる唇のかすかな感触、花夏の笑顔が闇夜に溶けた瞬間…。

花夏。

あの時何度も叫んだその名は、確かに彼女に届いていた。

あの日、病院で目覚めた日から、僕は自分の記憶を疑い始めていた。あれは単に、昏睡状態で見ていた夢だったんじゃないか、と。

でも、違った。

この記憶は紛れもない事実だ。

僕は彼女の絵を、しっかりと胸に抱き寄せた。





# 詩 部 門

詩部門受賞作

# ナビエー・ストークス方程式

西上 正浩

イヤな一日

鉛の空は雨が降るほど重くない  
だけど

快晴時の跳ね馬のような軽やかさは無くて

清々しくて

鬱屈してもいる

空腹なわけではないけれど

何か口に入れてなければ落ち着かない

退屈で

刺激を求めている筈なのに

何か起きれば

「面倒臭い」「怖い」と逃げ出す

一人が好きなきななの

SNSを覗いては

他人からの視線を常に気にしている

糖質制限をする自称健康オタクは

貧血で倒れて戦線離脱

主食がカップラーメンのMr.ファストフードは

怪我を知らない鉄人エリート選手

奥底にある伝えたい思いを掻き集めて

紡いで 吐き出した 本心からの言葉は

最も傷つけたくない人の中にある大切な何かを容赦なく

鉤爪でえぐるように 深く 傷つけ



誰かから借りてきた過激で解り易い魅力的な言葉は  
大して興味も無い大勢のエキストラから自我を奪い去り  
大地を揺らし 感動させる

嫌いになつて「消えて欲しい」と頼んでも  
消えてくれなくて

ずっと此処に居て欲しい「動かないで」と懇願したら  
次の瞬間には別の場所に居る

確かに其処にある筈なのに  
掴もうとすれば指の隙間から逃げていく

消えて欲しくても消えない  
固まって欲しくても固まらない

不安定な流れの運動方程式

幾つもある小さな真実が積み重なって  
ひとつの大きな間違いが誕生する

始まりは

単純でシンプルだった筈なのに

いつの間にか

複雑な方程式が出来上がる

底無し沼のように

深く 醜く 蠢いて

溪流のように

涼しく 魅力的で 滑らかな

解が無いジレンマの運動方程式

外側も内側も

世界は一秒ごとに流れている

君は本当に自覚できているのかい？

気が付いたら下流に流れ着き

取り返しが付かなくて

穏やかで 騒がしい お別れがやってくる

イヤな一日

余りにも奇麗に流れていく

一方通行の美しく素敵な一日

西上 正浩（にしがみ まさひろ）／琉球大学・理工学研究科博士前期課程二年



## 詩部門佳作

# 滞留

竹澤 さち

傷は、証明できないことを要求した。

下腹部と陰部に走る細い傷をなぞる。

血尿が発覚した当時、異常を知らせる紙の軽さに反して、周囲は事態を深刻に受け止めた。気づけば、不健康であることよりも、それは寧ろ血の異常に書き換えられていた。

沖縄以外の血が混じっているから、言葉が綺麗だから、よそよそしいから、そして、男らしくないから。適当に取繕われたこれらの要素はすぐさま統合され、瞬く間のうちに私の身体を否定的な補集合として、何かから締め出した。しかし、私を締め出した肝心の何かが分からず、疎外感だけが沈殿し、滞留していった。

誰かの小説で、停留寧丸の男は女性的だといった言葉を見かけたことがあったが、その適当な口ぶりに怒りを覚えたことがあった。知った口を聞くな、お前に何がわかる、と。

傷のない男の裸体の美しさを知った後、たった数センチの傷は私の全てを飲み込んだ。次第に、全ての問題は血が混じったことによる形質異常のせいではないかといった不安が生じ、私は身体の点検を自分自身に課し始めた。

不安をかき消すために新たに自分でつけた傷は、しかしあの傷よりも浅く、肌の新陳代謝によつていつの間にか消えていた。私自身で傷を上書くことはできなかったのだ。

この点検の声は鳴り止まず、日毎に大きくなるばかりで、何度も耳を塞いでみたが、耳孔と掌の間に響く轟音は、海岸に土砂を運び込むトラックや森で作業をする重機とヘリの騒音と重なり出した。そして、音を発する身体がこれらの暴力と一致した時、脈動の激しさは一層増し、傷は俄に赤みを帯び始めた。

尿意の少し手前で、体を縦に貫く確かな痛みが、私を強張らせた。急に尿道が裂け、あの傷と繋がり、そこから血が溢れ出した。突発的な痛みと恐怖で声が出ない。そして血同士が異物として衝突しながら凝固し、徐々に大きな瘡蓋になっていく様子に抗うこともできない

まま、亀裂に落ちていく不思議な浮遊感の中で、私の明確な意識は途絶えた。

そして、何を失ったのかも分からない絶望の底で、あの轟音が運んだ赤黒く鉄臭い土砂によって私の身体が埋められていくさまを、被さる土の中から、ただ呆然と眺めていた。

竹澤 さち (たけざわ さち) / 琉球大学・人文社会科学研究所博士前期課程二年





詩部門佳作

閉ざされた花壇の中で

島袋

昂也

花は綺麗に咲くという常識は

不細工に咲いた花の非常識

ふかふかで美味しい土も

遠い親戚から頂く水や光も

花に依っては唯の拷問

おしべとおしべがいちゃついで

花粉がどっかの大迷走

何かが可笑しい

何かが足りない

曖昧なものさしで埋まれた劣性

せつせと設えたこの花壇  
似た者同士が入れられて  
思惑通りに行かなくて  
結局その地で御臨終  
ねえねえ、造園主は一体誰？

毛嫌いされた屁糞蔓

悲痛な著莪の叫び

心を閉ざした鳳仙花

花と僕とのパーテーション

隠れた言葉は届いてますか？

水と肥料と抛り所

与えた主犯は造園主

埋もれた根っこに手を添えたい

隠れた養分共有したい

されどやっぱり造園主

咲くことだけが全てじゃないし

枯れるも腐るも面白味

あの綺麗な花も

この不細工な花も

どっかの凶鑑の非売品

誰だってそう

見知らぬ花壇のエゴイスト

何時だってそう

閉ざされた花壇に咲く

歪んだ一輪の花

島袋 昂也（しまぶくろ こうや）／琉球大学・法文学部人間科学科四年



詩部門佳作

アンサー

古波藏  
唯

この前うちの学校に

新しい建物ができたでしょう

綺麗なテールブルが沢山あつて

空に伸びたクリーム色の

美味しそうなあの建物

カフェみたいで心が躍ってしまいそう

教室棟のすぐ横に

小さな並木があるでしょう

通り道の途中にあつて

緑の香りも吹き抜ける

木に囲まれたトンネル  
雨降りには傘代わりにもなってくれるの

だけどね

スイーツみたいな建物の

できる前のあの場所に

静かに生えていた竹と

優しくて柔らかな風に

もう会えないのは寂しいわ

竹伐るや無口な吾背今何処

皆が通るあの木のトンネルの

傍の草を見てご覧なさい

小さな蜘蛛がせつせと動いて

星のような巣を作っていることを

一体何人知っているの

星のハンモックに揺れる小さき蜘蛛

色々なものを見てきた

見えるものも

見えないものも

けれど

花壇の彼岸花に問われたわ

「私がいつ咲いたのか知ってる」と

答えられなくて悔しかった

答えを言えないうちに

彼岸花は枯れてしまった

疑問符のドレスを着ている曼殊沙華

まだまだ見足りないのね

見えるものも

見えないものも

また今度

この花壇で遇えたら話しましょう  
他の人たちと変わらない  
無知だと知った私と

古波藏 唯（こはぐら ゆい）／沖繩国際大学・総合文化学部日本文化学科三年



詩部門佳作

# 春の詩集

荒井 青

「嘆息

君、君、

それを例えてはいけない

それは雨上がりの濡れた髪でも

裏紙に書かれた楽譜でも

夏の夕暮れでも

入り口でも

出口でも

何でもないんだ

ただ心が微細に振動しているだけなのに

それを君はなぜ例えたがる

♪ リビングルーム

落ちたらだめだ、というところに落ちたろう

君のことだよ？

原子の明滅に心を預けて僕は花の前で自慰をしたら

君は微笑んだ

(I sleep)

君は微笑んだ

(I eat)

それなのに僕がいら立ったのはノスタルジーに浸るのが億劫だったからだ  
分かる、でしょう？

3. IDO

バスの冷房が効きすぎていたから  
中学時代のジャージを引っ張り出して

名前の部分を隠して着てみた

俺の出身中学のジャージは赤色（これは学年によって違うけど）  
でもこれは属性を着ているんだ

それからさあ

「猫飼いたい」「わかる」/ iPhoneを顔に張り付けてみて

「モンハンの新作めっちゃ面白そう」「だからさ」/それはパンクの曲に叩きつけられて

「宿題やった?」「あ。やばい」/押し花みたいにつぶれて広がり

「眠い」「めっちゃ」/顔に纏わりついて仮面へ

[null]「回答」/視界の一切はYouTubeに

で、膝をジャージの、あのほら胴体のとこに収めて待ってたらさ

団地前

ピンポン♪降ります

4. ㊦

まち無理死にたい 井 共感したらR1

5. 例えてはいけない

「君、君、

それはただ心が微細に振動しているだけなんだけど

それによって君は少し摩耗したんだね

けれども傷を充たすことは

多分、大丈夫だよ

6.

荒井 青（あらい せい）／琉球大学・教育学部生涯教育課程三年



# 選 評

## 選評【小説部門】

### 第十一回びぶりお文学賞 小説部門 講評

日常を拠点に等身大の言葉で書く

大城 貞俊

今回の応募作品は九編。受賞作を出すのが困難かと思われたが、最終的には3人の選考委員全会一致での決定であった。

受賞作の「乗り物の鼓動」（西上正浩）は、例年の受賞作に劣らない優れた作品である。等身大の言葉で、等身大の感慨を素直に語ったところがよい。ここには爽やかな発見もオリジナルな認識も織り込まれており、まさに学生を対象にした「びぶりお文学賞」に相応しい作品であった。作品は大学生のぼくが主人公。ぼくは大学の研究室を出て熊本に帰省する彼女を空港へ送るところになる。この日常のわずかな時間にたくさんのお話が詰め込まれている。アメフトに興じる友人の物語。震災に遭って帰省する彼女の物語。彼女を愛おしく思うぼくのお話。そしてこれらの人々に関係する多くの人々の物語が投影され温かく丁寧に描かれる。

彼女を空港まで送る途次でのぼくの感慨も、彼女との会話も無理がない。生きることへの新鮮で若々しい疑問は、やがて人生で最も大切な答えを浮かび上がらせる。現代を生きる若者の「新しい恋愛小説」だとも思われた。また「震災文学」の一例であるようにも思われた。観念的な世

界を弄ぶ作品が多い中で、しっかりと生活に根を下ろした作品世界が簡潔で分かりやすい文体で展開される。窓外の風景に託された心情も絶妙で、イチオシの作品だった。

佳作の「水中花」（久保田大地）も印象に残った作品だ。単純なストーリーのラブロマンスで既視感を拭えないのだが、ディテールの描写には筆力がある。物語の展開にも工夫が見られ、独創的な比喻表現なども抜きん出ていた。この作者は、題材やテーマを違えても、さらに豊かな作品世界を創出できるのではないかという期待感をも抱かせた。

選外の「迷ヒ家」の作者は、読者をもう少し意識した方が良い。言葉を弄びすぎたがゆえにリアリティが感じられなかった。

「自動車学校」は7枚。やはり少なすぎる。そして登場人物の苦悩が年齢相応の苦悩になっていない。変換ミスの誤字が多すぎた。

「比良坂島」も10枚では受賞に届かない。作者の観念世界で作り上げた労作だと思われるが、思いつきだけでは小説にならない。名前の変換ミスも目立ち、丁寧な推敲をすべきだと思った。

「山吹一郎物語」は猫が人間になる物語で、発想は面白いが、やはり既視感は拭えない。せつかくの小説的仕掛けを設定したのだから、しっかりと人間の生死を考察し、新鮮な認識をも示得たらもっとユニークな作品になったのではないか。改行改段落は一字下げであるという表記の基本にも留意すべきだ。

「離別」は、作者にとって力の入った作品だと思われるが、力を入れすぎた。もう少し客観的な視点が欲しい。物語が拡散しすぎて焦点が定まらない。何組かのカップルが登場するが会話の



内容が飛躍しすぎてうまく伝わらない。カッブル相互の関係ももっと丁寧に描いて欲しかった。

「乱心すれども心躍らず、濫読すれども心驕らず」は、大仰な表現にやや違和感を覚えた。小説はディベートではなく論理の正当性を披瀝する場所でもない。人間の生活の言葉が飛び交う場所であり喜怒哀楽の感情が織りなされる場所である。延々と続く父子の会話には、さすがに興ざめがした。小説の多様性は認められるべきであるがウソはバレない方がいい。しかし、このような欠点や特徴を持っていても言葉を操り思考を巡らそうとする作者の姿勢には共感するところが大きい。

「大島」は、テーマが分裂した。「大島」の祭りのことを書きたいのか、家族のことを書きたいのかよく分からない。焦点を絞るべきだろう。誤表記、誤字、脱字も多すぎる。またエンディングも一考を要する。お母に殴られ、ぼくもこの村を出て行くとして兄貴と殴り合う場面は、この作品の意図を不明にした。戦争当時六歳だったぼくはどこへ行ったのか。このこともよく分からなかった。

さて、今回で私は選考委員を辞退する。我が母校琉球大学を含め学生諸君の文学に携わる営為を支援したいとして選考委員を引き受けたが、このバトンを引き継ぎたいと思う。

今年のノーベル文学賞作家カズオ・イシグロは、「分断が危険なまでに深まる時代、良い作品を書き、読むことで壁は打ち崩される」と述べた。この言葉に今一度耳を傾けたい。若い諸君の努力をいつでもどこでも応援している。有り難う。

（おおしろ さだとし／外部選考委員・作家）

## びぶりお文学賞選評

西森 和広

九編あつた投稿作品について感想などを記します。

「迷作家」は、何かからの突破、「ここから別の世界への脱出」、単純に言えばおそらくそれが主題なのだろうとは思いますが、正直よく分かりません。「男と女」、「拳銃」、「記憶・夢」、「ベトナム（戦争?）」、「キーワード」は『歌』、おそらくそれら散りばめられた要素にヒントがあるのだとは思いますが。

「水中花」は構想が明瞭で分かりやすいファンタジー、一種の幽霊話です。よくまとめていると思います。ただ登場人物、特にヒロインの名前「花夏」はどう読むのでしょうか。最後まで気になりました。名前の漢字の読みは一樣ではないということをお忘れなく。こういった例は他にも多く、気にかけてほしいと思います。初出時に仮名を振るとか、読み方が分かるような場面を入れるとかをお願いします。

「自動車学校」は、日記のような小品です。兄と妹の間の愛情が描かれ、ほのぼのとしています。言葉遣いへの気配りがもう少し必要でしょうか。例えば同じ場所を指すのに、「自動車学校」、「自練」、「教習所」の各語が使われていますが、その使い分けの基準が曖昧なようです。「自練」は沖繩で一般的な通称で、説明もされているので使用自体は良いとしても、ある時はこちら、ある時はあちらと使われています。そこへ突厥に本土で一般的な「教習所」の語が飛び込んでくると、

いよいよ気ままな感が強くなります。会話中ならそれもあってしょうが、地の文ではしっかりと基準を持って使い分けた方が良いでしょう。

「比良坂島」は怪異譚。少し短めで、冒頭から字句の誤りが見られ、登場人物の名前を間違えるなど、かなりあわてた印象です。人物の造形や話のつじつまなどにも、時間が掛けられなかったようです。物語の筋そのものは、全くの独創だとすればなかなかのものですが。

「乗り物の鼓動」は、最後まで素直に読むことができました。大学生である主人公の日常と、そこに突如起こった恋人との別れという出来事が、語り手である「僕」によって淡々と綴られてゆきます。終盤、表題の由来になった科学・哲学的な思考が披露されるところが強いて言えば書き過ぎかとも思われますが（つまり必ずしも皆が納得できないかもしれないが）、またそれもまたこの主人公の感性そのものなのですから、大事ななのでしょう。作品の最初と最後に、語り手の夢うつつのような状態を描く詩的な文章を配して導入と締めくくりにするなど、よく考えられた構成が取られています。また物語の背景に先の熊本地震の影響を取り込むなど、作者の社会意識や観察眼が伺えます。失恋という事態に向かっても主人公（語り手）の冷静さがひどく失われることはなく、私などからすればややスマート過ぎるかとは思いますが、そういう恋愛ももちろんあるでしょう。おそらくは作者自身か身近な人の体験談が基になっているように思われますが、全くの創作だとすれば大した想像・創作力です。

「山吹一郎物語」は、一見ジブリ映画の世界を思わせるようなファンタジーのようですが、実は女の子の気を引こうとした男のほら話なのかもしれません。もしファンタジーが狙いなのであ

れば、さらなる「リアルな」幻想の構築が必要かと思えます。いずれにせよ二人の登場人物とつての本当の物語はこれからという印象です。段落の付け方が適切ではないので気を付けてください。

「離別」は、やはり少々あわてて原稿を仕上げたかなという印象です。まずワープロ操作上のミスがあつて、大変読み辛くなっています。他に例えば、「ふたりの祖父を亡くした」と言いながら、ついに一人の話しか出てきませんし、三人称で語られてきた物語が突如一人称の語りに転じ、また三人称に戻るといふところがありますが、その意図がはつきりしない、などです。

「乱心すれども心躍らず、濫読すれども心驕らず」は三部から成り、かなり複雑な語りの構造を取っています。まず三人称で、ある青年の就職内定取り消しの経過が描かれます。おそらく意図的なのでしょう、読者に彼の名が分かるまでには相当の紙数が割かれます。そこへそれまで漠然と背後にあつた語り手が、突如「筆者」と名乗って介入をし、青年の意識や思考の代弁者となります。その後、彼とその父との哲学的議論のような口論が描かれ、息子が家を飛び出して第一部は終わります。第二部では父に視点が移され、息子へと思いをはせる内に、過去への追想へ至る父の内面が描かれます。学生運動時代の様子が、父の友人による政治・哲学的論議を通して描かれます。第三部では息子の帰還と、父と子の和解への一歩が示されますが、最後に再び「筆者」が登場し、父が見つけた息子の手記を引用して終わります。本作者は様々な文体上の試み、哲学的考察を行い、書きたいことを猛然と書き綴っているという印象です（字句の誤りなども時折目につきます）。一人の青年の成長過渡期の葛藤をテーマに、そこに父の過去の記憶を重ねるとい

う構想が見えてきますが、とっつき易い作品とは言い難いでしょう。「筆者」の介入が必要なかどうか、といった疑問なども多々ありますが、努力賞でしょうか。

「大島」は、しっかりと書いた書き手を思わせる筆致で始まります。ただやはり慌てたためか、言葉遣いや前後のつながりにややちぐはぐな箇所も見られます。沖繩・奄美の風土・風習、沖繩戦後の世相の描写などは、ある程度高い年齢の書き手を想像させます（事実そうでした）。表題が示すように、奄美大島の習俗の描写が中心になっていますが、本当の物語は最後に主人公の少年が家を出る決意をしたところから始まるのではないのでしょうか。

（にしもり かずひろ／法文学部教授）

## 第十一回びぶりお文学賞選評

### 日常を描くこと

武藤 清吾

入選作「乗り物の鼓動」は、冒頭と終末の連続性が印象的だ。プロログとエピログでは、ともに那覇空港で夢見心地になっている人物が描写され、連続した時間軸に設定されている。読者は、エピログまで読み終えると再びプロログに戻って読むことを促される。

全体は、このプロログとエピログとの間に僕の物語が挟み込まれた構成になっている。作中の登場人物には固有名詞はすべてつけられず、「僕」「彼」「彼女」という人称で表現される。個性の表出をかぎりなく押さえることで、どこにでも誰にでもある物語として設定されていることがわかる。非日常の特別な体験ではなく、あたかも自分が経験する日常の物語として、読者が受けとめやすくなるように工夫されている。

前半では僕の日常生活が丁寧な描かれる。僕が琉球大学の工学部棟四号館にある研究室に所属して研究生生活を送っていること、入学以来の友人がいて、その彼は福岡出身でアメフト部に所属していること、僕は愛車のワゴンRに乗っていて、この車が気に入っていることなど、僕自身の穏やかな語りによって物語が進行する。これらは後半に向かう場の設定になっており、その巧妙さから、読者はどんな事件が待っているのかを期待することになる。

だが、読者の期待は裏切られる。後半は、僕がマクドナルドの店内で遅れてくる彼女を待ちな

がら、彼女との出会いやデートの様子を回想する場面から始まる。宜野湾で彼女と見た花火の場面、熊本の実家に帰る彼女に頼まれてワゴンRで那覇空港へと向かう場面などが、前半同様に穏やかに描かれていくのみだ。

後半でも大きな事件が起きるわけではない。熊本に帰る彼女が僕と別れてほしいという場面が事件と言えそう言えなくもない。それでも、それは読者にすれば、まれにしか起きない事件ほどのことではなく、誰もがいつかは何度か経験する日常のできごとに過ぎない。熊本の震災も、できごとの大きさを強調する場面としてではなく、彼女が別れようとするきっかけを与える事実として描かれるに過ぎない。こうした描写は、大学生であれば誰でもが経験するささやかな物語であることを強く印象づけることになる。

この作品の魅力は、僕がこれらの日常を当たり前のできごととして受任するのをよしとしないところにある。日常の挿話に僕の心理が批評の言葉となって貼り付けられるのである。たとえば、前半のアメフト部の友人の思いを聞いた僕は「彼は間違いなく生きている。生きて鼓動を刻んで、戦っている。僕は少しだけ彼を羨ましく思う」と感想をもらす。あるいは、花火を見る彼女の手を握り、「僕はこのお祭りで彼女のちっぽけな手を握ったとき、遠い昔に神様に分断された僕の片割れをようやく見つけた様な気がした」と感嘆する。こうした表現に、作者の日常をまなざす柔らかい感性が埋め込まれているのに気づかされる。

もう一つ興味深いのは、各場面の物語が特定の具体的な空間で展開するという巧妙な仕掛けになっていることだ。僕の研究室、生協の学食、マクドナルドの店内、ワゴンRと、誰もが見知っ

ている具体的な空間を設定することで、物語の日常性はさらに具体的なものとなっている。中でもワゴンRの車内という空間で語られる僕と彼女との会話は、二人のこれまでの歩みを克明に映し出していく。

たとえば、震災以降に起こった彼女の家庭環境の変化を車内で聞き、彼女からそれを理由にした別れ話を切り出されたとき、僕の内面は車内の空間と重ねられて次のように表現される。「窓から見える外の景色はパラレルワールドで、触れられそうなくらい近くにあるはずなのに関わることができない異世界だ。外の世界で何が起こつてもこつちでは何もできないし、こつちで何か起きてても外の世界には何の影響も与えることができない。」僕も彼女も同じ「乗り物」の中にいて精一杯生きようとしている。しかし、それがうまくかみ合わないとき、二人の心は互いに触れあうことなく終わりを告げるというわけだ。

アメフト部の友人もアメフト部の「乗り物」に乗り、彼の生を燃焼させている。そう気づいたとき、僕は「生命が尽き果てないように僕にもできることはあるはずだ。なぜなら、僕もその乗り物の一部なのだから」と悟る。題名である「乗り物の鼓動」は、ワゴンRの空間に表象される僕の人生とそれを支える僕の心臓の鼓動をモチーフとしていると言えよう。

佳作「水中花」の人物には、固有名詞が与えられている。高校三年生の湊太と十五歳で亡くなった少女の花夏である。二人の名前には、彼らの思いが夏の海に重ねられていることを暗示している。花夏の生きている三号棟の402と特定された部屋で、「TAIR」と最後のAの一文が抜けたプレートがある部屋が舞台になっている。読み手には、けっして新しくない団地の一



室がイメージされ、二人の過ぎ去った時間が刻まれている場であることに気づかされる。

物語は、湊太が花夏の部屋を三回訪れる構成をとっている。最初は、湊太が花夏に会う場面である。花夏は病魔に蝕まれマイナス20℃に管理された肉体として生きている。湊太は、花夏の十五歳の誕生日に「水中花」を贈る。第二は、花夏がウンケーの日に亡くなり湊太が慌てて訪れる場面である。湊太は、花夏が死んだことで自らの心の崩壊を自覚する。第三は、花夏の部屋が整理され、机の中から一枚の絵が母親から紹介される場面である。

第二と第三の場面の間には、湊太が心を崩壊させ意識を失った間に、花夏と夏の世界を楽しむ物語が加えられている。湊太は砂浜で眠るうちに海中に引き込まれて身を沈めていた。その湊太の内面では、亡くなった花夏が湊太を死後の世界に連れていこうとしている間に、湊太が幻想の世界を体験しているかのように描かれている。二人があたかも「水中花」の中にいるかのようでもある。二人が夏の海に遊ぶことは、生きていた花夏の願いでもあり湊太の願いでもあった。一枚の絵は、湊太が前年に贈った画材セットで描かれていた。「水中花」「画材セット」と机の中一枚の絵が物語に厚みを与えている。

湊太の悲しみがエイサーの隊列、安里屋ユンタの音頭の描写で表現され、ウンケーの日に亡くなった花夏が一日だけこの世に戻ったと設定され、沖縄の習俗を背景にして描こうとする作者の思いを感じることができる。

残念なのは、最初のマイナス79℃で管理され生きる描写にリアリティが感じられず、その後の展開に微妙な違和感を覚えさせることだ。このイメージの難しさは作品を完成させる上で致命

的であった。

選外作も簡単に見ておきたい。「迷ヒ家」には観念的な描写が多く、人物の像が結びにくい。人物設定にリアリティを持たせることに心がけてほしい。「自動車学校」は書く枚数を増やすことが必要である。規定の枚数の三分の一程度ではこの人物の苦しみを描ききれない。規定の分量一杯に書くことを求めたい。「比良坂島」も規定枚数の半分ほどの分量であるため、思いつきの物語の印象があり損をしている。会話が延々と続く場面をやめ、風景や人物の描写に心がけよう。「山吹二郎物語」は、読みやすいが言いたいことが見えてこない。発想は面白いので、どこかで読んだような物語にならないような注意が必要だ。「離別」は横書きで印字した痕跡（カギ括弧や句読点など）が多く残っており、読みにくい。名護との出会いはそれなりに表現されているだけに残念だ。「乱心すれども心躍らず、濫読すれども心驕らず」は、就職活動を素材としている。身近な題材だが、何が言いたいのかが受けとめにくい。物語の軸を整えることが必要である。「大島」は戦争をテーマにしている読み応えもあった。しかし、戦争と奄美との関わりだけが印象に残り、焦点が拡散した。山場の設定にさらに注意したい。

応募作の中には、推敲不十分な原稿、誤字脱字が見られるものなど、応募の意欲自体が疑われるような作品があった。規定文字数を大きく割り込んでいる作品もある。応募にあたっては、早めに構想をして執筆に取りかかってほしい。また、書き手のモチーフを大切に、読み手が心を振るわせるような虚構の世界を届けてほしい。引き続き若い世代の積極的な応募を待ちたい。

(むとう) せいご／教育学部教授)

## 選評【詩部門】

### 第十一回びぶりお文学賞選評

松原 敏夫

今回は応募数が少なかった。いつも出してくる学校機関が今回はなく、結果、少ない応募作を審査することになったが、やはり物足りなかった。といって応募が多いからいい作品があるというものではない。今回、応募数が少ないものの受賞作を出したことはそれなりにいい作品があったからであつたし、言葉で言語世界を構築する、世界を言葉に変える、心や情景を詩のことばで表現する、という詩的態度のある作品が多かった。普通の散文なら説明すればすむ題材がそうではなく、詩という表現形式で表出しようとするのは、作者が、それなりに持っている言語表現への感覚、内部の緊密感、比喩、歌、リズム、韻律、イメージで内的な世界を表現する詩的言語の使用、……といった、詩の形でしか、表現できないものがあるということを感じたからである。口語的と思案型、内的な訴え、感動的なことの詩的表現をいかに言葉で表出するかは瞬間における作者の言葉に対する感覚が求められる。詩的表現にすぐれる人は他者へ自分やものごとを伝えることが上手である。作品は、読めば読むほど味が出るものがある。逆にいいようにみえて、味がないものがある。何度も読みたくなる楽しさ、心に響く言葉、言語の力に気づき、比喩や発見、言葉は楽しいと思ってくれたら言語力を試すコンクールの役割は充分に役にたっている、といえる。

## 【受賞作】

### 「ナビエーストークス方程式」（西上正造）

ナビエーストークスとは学問的な語彙で流体力学の用語だそうである。こういう学問的、理知的な知識を砕きながら、人間の不安、嘆き、嫌悪、シニカル、批判、復活の劇に置き換えているのは作者が「ナビエーストークス方程式」とはなんぞやということを追求する過程で出てきた心的な展開である。方程式を人間世界にあてはめれば、こうなるという面白さがある。数式は詩である、という誰かの言葉を思い出した。「溪流のように／涼しく 魅力的で 滑らかな／解が無いジレンマの方程式」という言い方や「外側も内側も／世界は一秒ごとに流れている」という表現は、作者の方程式をイメージに変換したあとの詩的表現があつてうまいと思つた。人生への適応という技を披露する感覚は、数式や方程式を知つたもののみがいえることだろう。日常は方程式で語れるものではない。ないが、あるように思わせるのが、この作品の独特なところだ。私は読んでいて不思議な言語感覚にひたつた。作者は、またこういう。「始まりは／単純でシンプルだった筈なのに／いつの間にか／複雑な方程式が出来上がる」。人生も恋もそんな迷路のようにあるんだろう。しかし、いつか問いは解かれるものだ。「イヤな一日／余りにも綺麗に流れていく／一方通行の美しく素敵な一日」。数式に人生を置き換えた表現は思索的でなかなかのものだ。矛盾を並べながら言葉の力で自分の現在や他者の現実を問いにして、しかし綺麗に、素敵なものにした。

【佳作】

「滞留」（竹澤さち）

疎外感にある存在をいたくても、うまく素直にいえなことがある。滞留は、葛藤、傷、血となつて作者の内部で暴れているものである。おさまりのつかない内部が血液を含んだ尿として、あるいは性の傷となつて、露出している。自己不安の解消のために自己を点検するように言葉で追求する。性や存在とはなにか。生きるとはなにか。そういう問いが不確かなものとして内部を重たく自己否定と自己肯定に分裂し、その分け目でみる視覚的な情景が文脈をふるわせている。自己処罰のごとく、重たくはねる魂の物語のような記述に読者は余韻を持つし、なにか言い得ない秘密がなお隠されているような謎のような深みのある作品である。

「閉ざされた花壇の中で」（島袋昂也）

閉ざされた花壇、というのは切なさの表現だろう。美しい花を見に来たのに、思ったようになり育ちが悪い情景へのいらだたしさが、行間に浮沈している。作者の視界は花壇の中で花の美を求める。しかし枯れていく花たちがある。作った造園主への不信と期待が交錯してくる。花たちへの愛情があるのに、うまくいかないことへの声を内部に秘めたまま言葉が流れる。花に對峙しているうちに、やがて造園主と對峙している自分を発見する。他者＝造園主のことを書くこととしたのは作者の關係の生への観念である。逆説的でいいと思つたことが失敗すること。へそかずら、しゃが、という耳慣れない花を使うのは作者が植物好き、自然への愛情があるからだろう。最後の連の詩句は、作者が一番訴えたいことである。とくに「歪んだ一輪の花」という表現は精神的

で意味的である。

「アンサー」（古波藏唯）

視覚に見えるものと見えないものに世界がある。古いものと新しいもの。そこを歌でつないでいる。「竹」「星」「蜘蛛」に対する作者の意識は文学的で感性的である。挿入された俳句（？）もどこか不自然でなく、かえって作品の感度を高めている。「見えるものも見えないもの」も見てきたとする自負を彼岸花に「いつ咲いたか知っているか」と問われ、応えられなかった自分を「無知」だと悟ることは次への「希望」として人生の決意を感じる。変化するものへの自分の切なさを気づく瞬間である。この作者は自然や風景に敏感な感受性をもつひとであると思う。外部のまなざしから何かを発見していく感覚の豊かさ、詩的感覚のあるひとである。

「春の詩集」（荒井青）

携帯語（スマホ語）というのはこういう表現をいうのだろうか。行の表現が自由自在にある。自在であるが、心にあるなにか苦悩のような言葉を会話調で流している。「まだ無理死にたい共感したらㄋㄋ」という危うい言葉も軽くスマホ的に書かれている。他者とのズレを修復するのに言葉をまわしている。デリカシーな感覚をもっているように思うけれども、心の立ちどころをみつめることも必要である。心象的な心動きにつきうごかされて、恣意的な書き方になっているのは自己再生の手法だと思うが、迷いが強すぎて雑になっている。感情と心情に依存し過ぎて、思索の動きがないのが惜しい。「ただ心が微細に震動しているだけ」と白状するのは正直である。詩の言葉は社会性をもって訴えることもあれば、こういうふうに個人の自在、任意に言葉を吐く

こともある。それでも詩の形式である。言葉遊びの感覚で内部を書いている。スマホ時代の今風の詩作だが、粗さが目立つので、もうすこし整理して出してほしかった。

(まつばら としお／外部選考委員・山之口貌賞受賞詩人)

## 解のない方程式

宮城 隆尋

「ナビエ・ストークス方程式」（西上正造）は多くの連で、行為と相反する作用が描かれる。心を引かれたのは（奥底にある伝えたい思いを掻き集めて）からの二連だ。誰もが有る程度は結果を想定して行動するだろうが、行為が思い通りの結果につながることは多くない。さまざま人の思いが交錯してできているのが人間社会だから、一人の思いだけで事が運んでいくものではない。とりわけ思い入れの強い行動、思い入れの強い相手に対する言動が想定外の結果につながった時、衝撃は大きい。しかしそういう時ほど失敗してしまうのが世の常、人の常というものだろう。

人が人と関わり、生きる時に避けられない苦悩を思わせる。その経験、後悔の中から発せられた言葉で書かれている。その言葉には重みがある。詩に作者の生きる姿が映し出されている。読み手は自己に引きつけ、考えさせられる。

冒頭は〈イヤな一日〉、最終連も〈イヤな一日〉で始まる。しかし自らの生を拒絶しているわけではないのが、最終行から伝わる。生と正面から向き合っている。

タイトルの「ナビエ・ストークス方程式」は普段、詩とは縁遠い分野にある言葉だ。さまざまな場面で使われる方程式だが、決まった解というものがないという。詩を書く上で先達の言葉に学ぶことも重要だが、まったく畑違いの分野から言葉を導入することも、読み手の想像力を刺



激する。その言葉についてよく知っていないと成功しない難しさもあるが、この作品についていえばうまくいつている。こういつた言葉の導入が成功すれば、作品としての懐が深くなるだけではなく、詩というジャンル自体の幅を広げる可能性もある。

「滞留」(竹澤さち)は静かな筆致だが、奥底に怒りや悲しみが込められていて、引き込まれる作品だ。作者の身体にあるウチナーとヤマト、二つの血について書かれている。相反する血によって、身体を引き裂かれそうになっている苦悩が伝わる。

この苦悩は、沖繩が置かれた社会状況によって引き起こされている。必ずしも沖繩に住む人々が望んだ状況ではないからこそ、反発する力は強さを増している。すさまじい力がぶつかり合う地点に生を受け、たえず衝突を引き受けざるを得ない境遇だ。

この境遇を恨み、目を背ける道もあるかもしれない。しかし作者はあえて立ち向かい、その社会性の中に自らの身体を重ねることで、進むべき道を見いだそうと模索している。それは自らの存在を認め(二つの血を認め)、苦悩を(二項対立を)乗り越えようとする尊い行為だと思う。

「春の詩集」(荒井青)は作中の言葉(例えてはいけない)を体現したような作品。スマートフオンの中でやりとりされるような現代的な言葉の往来を例えることなく、トレースしたように描いて見せる展開は刺激的だ。それらの言葉は厳密ではなく、言葉のみによって意味を伝えたり共感と呼んだりすることにこだわらない。文章として成立していない断片のような言葉であったり、生の実感が抜け落ちた記号であったりする。ㄣㄣ(リツイート)などの行為によって補完されなければ意味の伝達すらままならない。言葉が自立していない、自己完結していない点がリアルだ。

第5連は（例えてはいけない）が題となっていて（多分、大丈夫だよ）という曖昧な言葉でくくられる。生活の上では便利な言葉だが、投げやりだ。生活の中において文学的な表現にどれほどの価値があるのか、突き放した批評性がある。そして最終連はそれらの言葉の断片すらなくなり、まったくの無になってしまふ。短文化、高速化、記号化が進んだ末に言葉がどうなっていくのか、近い将来の言語状況を示唆しているようで寒気がする。

「閉ざされた花壇の中で」（島袋昂也）は、花壇の中にさまざまな草花が生きる情景が描かれ、人間社会の縮図のようだ。花は咲いていることもあれば、枯れて腐っていることもある。超越的な力の持ち主である（造園主）も登場する。花たちは自分たちではどうしようもない力によって分類され、その場所でしか咲くことはできない。（歪んだ一輪の花）となつて咲くことに意味を見いだすか、作られた秩序を破壊することを夢見るか。どのように生きるべきか、読み手にゆだねられる。答えを示さないことも、詩の重要な手法の一つだ。

「アンサー」（古波藏唯）は詩の中に俳句を取り入れた。俳句で描かれたところも含め、詩に徹して描くべきだという見方もあるだろう。作品に同居する詩と俳句がどちらかを説明してしまえば、言葉の力を相殺する。この作品は俳句に身の回りの自然へのまなざしがあり、俳句以外の詩行には自己を見つめる視線を感じる。そのことによつて詩としての深まり、解釈の多様性を生んでいる。自分に合った詩法を探す姿勢もいい。

選外となつたが、入選候補に挙がつた作品は「まなざし」（常川空雅）、「サンサナー」（玉城琉舞）、「他殺」（竹澤さち）、「He'd been washed atown」（荒井青）だった。ほかにわたしが気になつ

た作品には「呼吸」(芦桐薫)、「輪郭」(翁長徹)、「夕立に溺れた蟬を愛すということ」(知名紗也加)、「親友」(大石ゆり)、「風穴」(安堂亮仁)、「執着」(にしひらまさき)があった。

応募作の中に既発表作品があったのは残念だった。募集要項をよく読んでほしい。また誤字があったり、句読点の位置がおかしかったりするなど、推敲が不足した作品は、内容がよくても積極的に推すことができない。

入選に届かなかった方々は、ぜひ来年の受賞・入選を目指してほしい。そして今回の入選者や卒業する人々も詩を書き続け、さまざまな場所で腕を試してみてほしい。「びぶりお文学賞」以外にも、県内には「おきなわ文学賞」、山之口褒賞(詩集が対象)などがある。全国に目を向ければ、詩誌「現代詩手帖」や「詩と思想」などに投稿欄があり、日本現代詩人会や日本詩人クラブのホームページからも投稿できる。ストックを詩集にまとめれば、中原中也賞などさまざまな詩集賞がある。書き続け、挑戦し続ければ、いずれ多様なステージで作品が日の目を見る時が来るはずだ。今回の応募作に、そう感じさせる作品が多くあった。

(みやぎ たかひろ／外部選考委員・山之口褒賞受賞詩人)

## 第十一回琉球大学びぶりお文学賞 選考経過

第十一回琉球大学びぶりお文学賞は、平成二十九年五月一日から十月三十一日までの応募期間に、小説部門に九編、詩部門に三十三編の応募がありました。

所属ごとの内訳は次のとおりです。

【小説部門】 琉球大学Ⅱ七編（内訳 法文学部Ⅱ二編、理学部Ⅱ一編、農学部Ⅱ一編、教育学研究科Ⅱ一編、理工学研究科Ⅱ二編）、沖縄大学Ⅱ一編、名桜大学Ⅱ一編

【詩部門】 琉球大学Ⅱ十九編（内訳 法文学部Ⅱ七編、教育学部Ⅱ三編、理学部Ⅱ二編、工学部Ⅱ三編、人文社会科学研究所三編、理工学研究科Ⅱ一編）、沖縄国際大学Ⅱ八編、名桜大学Ⅱ五編、沖縄工業高等専門学校Ⅱ一編

また、学年ごとの内訳は次のとおりです。

【小説部門】 一年次Ⅱ一編、二年次Ⅱ一編、四年次Ⅱ四編、大学院Ⅱ三編

【詩部門】 一年次Ⅱ五編、二年次Ⅱ九編、三年次Ⅱ十一編、四年次Ⅱ三編、大学院Ⅱ四編、高専四年Ⅱ一編。

小説部門は、応募数が九編と少なかったため、附属図書館職員による一次選考を行わず、三名の選考委員（大城貞俊氏、西森和広氏、武藤清吾氏）による選考が行われました。また、詩部門には、三十三編の応募がありました。こちらも附属図書館職員による一次選考は行わず、二名の選考委員（松原敏夫氏、宮城隆尋氏）による選考が行われました。

選考会議は、詩部門を十一月二十九日、小説部門を十一月三十日に開催し、既発表のとおり入選作を選出しました。これら入選作を含め応募作の選評については、前出の選考委員による選評をご覧ください。

本文学賞は、平成十九年度に創設されましたが、第十一回目を迎えた今年度は、創設以来初の小説・詩の両部門同時受賞となりました。

本文学賞が、引き続き県内学生の文学活動の活性化を促進し、地域の文化活動のリーダーを輩出する一助となることを期待します。

(附属図書館職員)

# 第11回 琉球大学びぶりお文学賞

募集締切：平成29年10月31日(火)必着  
発表：平成29年12月上旬予定

## 【小説部門】

受賞作1編 = 海外旅行またはノート型パソコン(20万円以内)

佳作数編 = 1編につき図書カード5万円分

※海外旅行を選んだ受賞作は、研修内容を「海外見聞記」として(図書館編「ふりかか」)で公表することを義務付ける。

## 【詩部門】

受賞作1編 = 図書カード5万円分

佳作数編 = 1編につき図書カード1万円分

## 【選考委員】

小説部門/大城真俊(作家)、西森和広(法文学部教授)、武藤清吾(教育学部教授)

詩部門/松原敏夫(山之口親賢受賞詩人)、宮城隆尋(山之口親賢受賞詩人)

## 【応募要領】

●ジャンルは小説・詩の2部門とする。

●未発表作品に限る。

●日本語で書かれた作品とする。

●応募資格

・沖縄県内の大学・大学院大学・短期大学・高等専門学校に在学する学部学生(高専の場合、本科4年次以上)及び大学院生とする。

・ただし、過去において受賞作となった作品の作者は、同一部門に応募することはできない。

●応募方法

・小説部門/詩部門ともに、A4半横長用紙にタテ書き、1枚につき30字×40行、12ポイントの文字で印字する。

・小説部門の応募原稿は、20枚以内とし、1人1編の応募とする。

・詩部門の応募原稿は、1編2枚以内とし、1人3編まで応募可能とする。

・小説部門と詩部門の重複応募を認める。

・必ず通し番号(ページ番号)を入れて右肩を綴じる。

・書き始めにタイトル、氏名を明記する。ペンネームも可。

・原稿の末尾に、住所、電話番号、メールアドレス、氏名(本名・ふりかか)、

氏名(ペンネーム・ふりかか)、大学名・学部・学科(大学院の場合は研究科)、学年、年齢を付記する。

ホームページの投稿用フォームをダウンロードして貼付する形でも構わない。  
(個人情報応募に関する連絡以外には使用しません)

・応募手段は、直接持参、郵送、Eメールでの送付(メール添付での応募の場合、PDF形式)とする。

・応募原稿は返却しない。

・入賞作品の著作権は、琉球大学に帰属するものとする。

## ●送付先および問い合わせ

〒903-0214 西原町字千原1番地 琉球大学附属図書館

情報サービス企画係 電話:098-895-8167 mail:tskikaku@to.jim.u-ryukyu.ac.jp

びぶりお文学賞

検索

過去の受賞作  
応募や選考が  
送れます!

第十一回琉球大学びぶりお文学賞受賞作品集

発行日 二〇一八年三月十五日

編集 琉球大学附属図書館

発行 国立大学法人琉球大学

〒九〇三―〇二一四

印刷 株式会社 近代美術  
沖縄県中頭郡西原町字千原一番地



| 第11回 琉球大学 びぶりお文学賞 |

小説部門 | 乗り物の鼓動  
受賞作 | 西上 正浩 (琉球大学)

詩部門 | ナビエ-ストークス方程式  
受賞作 | 西上 正浩 (琉球大学)

佳作 | 水中花  
久保田 大地 (琉球大学)

佳作 | 滞留  
竹澤 さち (琉球大学)  
閉ざされた花壇の中で  
島袋 昂也 (琉球大学)  
アンサー  
古波藏 唯 (沖縄国際大学)  
春の詩集  
荒井 青 (琉球大学)





| 第11回 琉球大学 びぶりお文学賞 |

小説部門 | 乗り物の鼓動  
受賞作 | 西上 正浩 (琉球大学)

佳作 | 水中花  
久保田 大地 (琉球大学)

詩部門 | ナビエ-ストークス方程式  
受賞作 | 西上 正浩 (琉球大学)

佳作 | 滞留  
竹澤 さち (琉球大学)  
閉ざされた花壇の中で  
島袋 昂也 (琉球大学)  
アンサー  
古波藏 唯 (沖縄国際大学)  
春の詩集  
荒井 青 (琉球大学)